

ヘプバーン、マティーア兄弟と美華書館

樽本照雄

上海にあった印刷所の美華書館は、英語名を American Presbyterian Mission Press (略称 A P M P、または P M P) という。日本語に直訳すれば、アメリカ長老派教会伝道印刷所となるだろう。

宣教師が書いた手紙に「われらがミッション印刷所」という表現を見ることがある。アメリカ長老派教会の関係者が使えば、A P M Pを意味する。組織が異なれば、呼称が同じミッション印刷所であっても別の印刷所になる。区別するためには、漢語で主として使用する美華書館がわかりやすい。また、中国では俗に長老会書館などという。そう記した印刷物があるわけではない。あくまでも俗称だ。

美華書館は、現在は存在していない。だが、周知のように日本と中国の双方で有名だ。

中国においては、キリスト教関係を主としてそのほかの分野を含めた印刷物を多数送り出して知られる。美華書館が導入した印刷機器、漢字の活字製造法は、中国近代印刷史において大きな役割をはたした。また、著名であるひとつの理由は、商務印書館を創立した中国人の幾人かが美華書館で働いていたからだ。人と宗教のつながりで美華書館の名前がでてくる。

日本では、日本語の辞書複数を印刷したことで知られている。和英英和仏和独和といったそれぞれの辞書を印刷するには、当時の日本ではまにあわなかった。上海の美華書館に印刷を依頼せざるをえなかったという。

今までにわかっていることを紹介する*1。

ヘプバーン辞書初版と美華書館

上海の美華書館で印刷された日本語辞書複数がある。そのなかで著名なのは、ヘブバーン（James Curtis Hepburn, 1815-1911。日本ではヘボンで知られる。アメリカ長老派教会の宣教医師）の『和英語林集成』（美国平文先生編訳、1867初版）だ*2。ヘブバーンは自分が編集した和英辞書を印刷するため、日本から2度、中国上海に出向いている。初版のときは、1866年に夫人および岸田吟香と一緒におもむいた。第2版については、5年後の1871年に夫人と連れだって行った。

まず、ヘブバーン書簡から辞書初版にふれた箇所を主として紹介したい。外国伝道局本部（以下、アメリカ本部と略す）にあてた手紙から関係部分のみを引用する。以下は、高谷道男編訳『ヘボン書簡集』（岩波書店1959.10.30 / 1977.10.20二刷）による。また、岡部一興編『ヘボン在日書簡全集』（教文館2009.10.10）に収録されるものには、「全集*頁」と末尾に追記する。

ヘブバーンは、横浜において伝道と医療に従事していた。そのうえに、辞書の原稿執筆を進めながら、上海で印刷することを考えている。

1864年2月10日*3 わたしは、他のことをほとんど止めてしまうほどに、辞書の編纂に没頭しております。もしできることなら、来秋、辞書の印刷を始めたいと思っております。そのことでわたしはガンブル氏と文通をしております。そして上海に行き、印刷が終わるまで滞在しなければならないでしょう。この著作が印刷されたら、本部に一切費用をかけずに印刷しても、本部の財産とすべきであると、あなたはお考えになるでしょうか。この件についてあなたのお考えをお聞きしたいと存じます。当地の友人の一人が、辞書の売上から返済するという必要資金のすべてを立て替えようと申し出てくれております。このことについては、わたしの好むように自由にさせていただきたいと思いません。全集165頁

この時点で、上海の印刷所美華書館は皇城の小東門外にあった*4。その責任者がギャンブル（William Gamble, 1830-1886。日本ではガンブルで知られる）である。彼とヘブバーンは、ともにアメリカ長老派教会に所属している。ギャンブルの名前は、日本語辞書を印刷することでアメリカ人宣教師のあいだですでに知られていた。のちのことになるが、彼は美華書館を辞職した1869年、来日して本木昌造らに活字製造と活版印刷の方法を伝授した。日本では多くの人が知っている*5。

ヘプバーンの手紙でひとつ目を引くのが、印刷費用についての言及だ。アメリカ本部からの出資はないらしい。ヘプバーンの支援者が費用を負担するという。

辞書の編集と印刷時の校正に協力した日本人がいる。ただし、ヘプバーンの手紙には名前もでてこない。岸田吟香（1833-1905）である。

和英辞書編集の状況を知るために、先行著書から引用して紹介する。

眼病をわずらった岸田吟香が横浜のヘプバーンに治療してもらったのが契機だった。岸田はヘプバーンが和英辞書を編纂中であることを知る。また、ヘプバーンからいえば、和漢語をよく知る日本人の助手を求めていた。ふたりは合意し、岸田はヘプバーンの施療所に移る。彼は施療所の手伝いをしながら、辞書編纂にも協力した。

（樽本注：施療所での）施療を終ると、ヘップバーンと吟香とは書齋に退いて、和英辞書の編纂を進めた。ヘップバーンは施療所をこゝに移した文久二年（一八六二年）の終り頃から、この大著の編述に手を着けており、吟香の移つて来た元治元年（一八六四年）には、誰を助手にしたものか、すでに「真理易知」と称する邦文の翻訳書を公刊しているばかりでなく、自ら「平文」と号するほど、日本語に対する自信を持つていたけれども、何しろ渡日後六年余の時日を経過したのに過ぎない時であるから、厳密な辞書の編纂となると、助手吟香に負うところが多く、吟香は吟香でまたヘップバーンの人となりに心から推服していた上に、和英辞書の編纂に特殊の興味を持つていたので、医療以上の情熱と興奮とを持つてこの仕事に精魂を傾注したのである。その上、吟香は和漢の学に通じ、庶民の言葉にも通じており、且つ、多少、英語をも解したので、和英辞書の編集には最も適任者であつた。ヘップバーンは偶然にも絶好の助手を得たわけである。^{*6}

文中に見える『真理易知』の翻訳書は、そのとき日本では印刷できなかった。あとで述べる。

説明されてみれば、和英辞書の編纂に日本人助手がいたことは、当然のような気がする。ヘプバーン書簡に岸田の名前がないとしても、日本では周知のことだ。

辞書の編集が終了してのち、ヘプバーンは、それを印刷するため上海に行った。

1866年12月7日 御承知のように、わたしは上海に来ております、理由は辞書の印刷のためです。十月十八日に横浜を出発しました。ここに来てから赤痢と間歇熱にやられ二回も病床につきました。そうひどくなかったので長くは床についておりませんでした。でもやせて力が抜けました。全く上海が恐ろしくなりました。上海はマラリヤの本場です。しかし仕事を完成するまでここに止まりますが、それがすんだら、喜んで日本に帰って行きます。印刷の仕事はゆっくりしております。ガンブル氏の印刷技師としての腕前と天分とがなかったら、全くできなかったでしょう。これまでのところではあらゆる障害を乗り越えることができたのです。彼が最も美しい日本字の活字を銅製の母型に作り、一揃いの日本字の活字を鋳かためたのです。英語の大文字、アクセントのついていない母音や、イタリックなどが無いし、また上海でそれらを得ることができないので、ガンブル氏自ら母型を作って、必要なだけを鋳かためました。これだけお話ししたら、印刷がどれ程むずかしいものかがおわかりになるでしょう。このために一ヵ月以上を費したのです。わたしどもは着々と仕事を進めております。僅か活字をならべるだけに五人の植字工を使って、二日に八ページの印刷をしあげたいと思っております。やっと四十ページおわり、A・BとCの一部ができたわけです。この仕事がいつ完成するか、はっきりわかりませんが、おそらく六ヵ月では終わりますまい。176-177頁、全集199-200頁

印刷の中身は和英辞書だ。日本語活字が必要になる。美華書館には、当然ながら基本的な英字と漢字の活字はある。だが、ヘプバーンの手紙を見れば、英字であっても特別な書体は所有していなかった。

日本字についていえば、当時、所蔵していないわけではない。それより以前に、ブラウン (Samuel Robbins Brown, 1810-1880) 編『Colloquial Japanese 口語日本語対話』(1863。本稿では『日英会話篇』を使用する)を美華書館が印刷したとき、日本語のカタカナを製造している*7。

ガンブルが「最も美しい日本字の活字を銅製の母型に作り」というのは、ヘプバーンのいうとおりだろう。しかし、その「最も美しい日本字」は、どこから持ってきたのか。説明はない。

上海の美華書館でヘプバーンとともに仕事をこなしたのが、さきの岸田吟香だ。彼の書いた日記がある。

岸田吟香の上海日記

岸田吟香『吳淞日記』*8という。和英辞書の印刷を管理するヘブバーンを手伝うために、岸田は上海に長期間滞在した。題名のとおり、そのときの状況を記録したものだ。現存するのは第3、5、6の3冊だという。第2冊は、「参考」として最近の同書に翻刻収録されているからこちらを見る（漢数字は旧暦を意味する。〔 〕に新暦をいれる。[]は異同を示す）。

同治五年十二月八日〔1867.1.13〕 午後、小東門外的美華書館へいたら黄廷元がいふに、先刻、張魯先生と涂子巢、高鶴亭三人でおまえさんの處へお尋申とていきましたといふから、……390頁

岸田の滞在先（湯先生家）は虹口にあった。ヘブバーン夫妻も、岸田と同じ場所に滞在していたのではないか。辞書の校正と原稿執筆が同時に行なわれているならば、そのほうがなにかと便利だっただろう。日記の記述だけでそう推測する。ただし、断定はしない。ヘブバーンは、「ヘボン（また、へぼん）」として登場している。ふたりで辞書について意見を交換したとか議論したとかいう記述も、日記にはない。仕事の分担がはっきりしていたのだろう。当時独身だったギャンブル（樽本注：彼が結婚するのは、アメリカに帰国してのちフィラデルフィアにおいてである。時に44歳）は、小東門外にある美華書館の（たぶん、責任者用）家屋に住んでいた。教会堂については言及がない。日記の記述を拾って以上のように理解した。

岸田は、辞書の校正をするために美華書館へ毎日通っている、と私は想像していた。だが、そうではなさそうだ。校正用ゲラが出てくる状況により忙しさの度合いは変化しただろう。ヘブバーンとは違って、岸田にとって多忙の時期は、すでに終わっていたのかもしれない。ひまな時間に彼は、なにをしていたか。吟香日記を読めばおおよそがわかる。絵を描いたり作詩をしたり、名前のあがっている中国人、美華書館の工員だろう、と飲んだり食事をしたり。上海県城内を散歩して書画を売りつけられたり。上海を訪れた日本人の相手をしたり。「靖遠街といふ女郎屋ばかりあるまちをひやか」（52頁/319頁）したり。また、書画の関係で上海にいる中国の文人と筆談したり、と平穏な日常を上海ですごしている。わざとそう書いているのか。あるいは、多忙を多忙とは思わない豪胆な性格なのか。文面からは、仕事に

苦しんでいる様子は見られない。悠々と作業を進めている。

辞書の校正刷りは、印刷所から岸田の宿泊先にも配達されていた。

十二月九日〔1867.1.14〕 四五日前^{ゼン}に此楼上にて協文と字書を校訂してゐたりしに、……391頁

校正をするのは、岸田だけでなく中国人も手伝っていることがわかる。

十二月十三日〔1867.1.18〕 今夜字書二百枚まで板^{ハン}に成て来る。規模奇謀なという字の處までいきなり。しかし紙数八百張なり。395頁

「規模奇謀」は、ともに和英辞書の200頁に掲載されている。「二百枚まで板に成て」というのは、200頁まで版組されたという意味だ。

十二月二十五日〔1867.1.30〕 和英対訳詞書も、もはやはんぶんできあがりになつたとおもふ。こんやまとまるといふことバの處のあたりまで校正した。405頁

旧曆翌年、元日に小東門外美華書館へ行くと黄廷元、涂子巢、高鶴亭ら20人ばかりが集まって年始の宴を催している。そのころ、岸田は和英辞書を日本語で「和英対訳詞(字、辞)書」と呼んでいた。彼が独自に使用する仮称である。正式の和訳書名はもっとあとで定められることになる。和英辞書に関連する箇所をまとめて示す(影印頁/復刻頁の順)。

同治六年正月十五日〔1867.2.19〕 扱又字書の活字を新にうゑた處のしたずりがきてゐたから校合して……58頁/319頁

二月朔日〔1867.3.6〕 辞書が四百張(この張は395頁の張と異なる)の余できあがる。今情死^{シンヂウ}といふことバまで板になつてきたのを校合する。118頁/337頁

三月六日〔1867.4.10〕 七つ半ごろ美華書館へいく。是八詩韻合璧の事についてなり(中略) けふ英語をさきにして和語をひく方の字書がはじめて版になつてくる。166頁/351頁

「情死」が出ているのは辞書の408頁だ。「四百張の余」というのはそのことをさしている。『詩韻合璧』は韻書の名前。どう理由で岸田が美華書館に行ったのか。詳細は書かれていない。ヘプバーン辞書初版は、和英が558頁（附録を含む）、英和が132頁の合計690頁である。3月6日時点で全作業の約6割が終了しているにすぎない。約1ヵ月後の4月10日時点では、約8割までのところに来た。

同じ頃、ヘプバーンは、アメリカ本部にどのような報告書を送っているか。

日本語の活字を作成するのは手間がかかるし骨が折れる。ギャンブルはヘプバーンの要望を受け止めて着実に実現した。ヘプバーンは、ギャンブルの「印刷技師としての腕前と天分」を認めている。「あらゆる障害を超えることができた」というとおりだろう。その結果、彼の技術にたいする信頼がヘプバーンに生じたとわかる。

1867年1月25日 丁度今はいつもよりももっと仕事におわれているのです。辞書は目下、一日六ページの割で印刷中です。誤植の多い校正刷の訂正をするほかに、最初計画していなかった「英和」の第二編を書き上げなければならないのです。第一編「和英」の部の約二百五十ページ分が印刷出版されました。和英の第一編は大体六百ページで、第二編（英和の部）は多分、二百五十か三百ページになります。六月一日までに全部を完成したい希望です。経費がいくらかかったか、申し上げにくいのです。植字だけで一ページニドル払っております。右の書物の売上高の中からこれを払うつもりです。178-179頁、全集201頁

岸田の日記にただよふのんびりした雰囲気とは、異なる。ヘプバーンは、仕事におわれている。新しく英和の原稿を書く必要ができたからだ。印刷をはじめたときは、2日に8ページの速度だった。1日になおせば4ページだ。約2ヵ月後にはそれが6ページに加速している。たぶん、活字もふえ、印刷にも慣れたのだろう。1日6ページの速度であれば、あと約1ヵ月は上海に滞在しなければ作業は終わらない。上海での支払いもドルで計算している。

岸田吟香『吳淞日記』から、もうすこし和英辞書に関係する部分を紹介する。

1867年三月十五日〔4.19〕 けふへぼんデクシヨナリイの序をかく（樽本注：ここのデは、英字Tに濁点をつけて表わす）。204頁 / 361頁

1867年三月二十二日〔4.26〕 けふ和英辞書のうちへいれる為に日本の仮名。万葉仮名[字]。カタカナ。ひらかな。いろは。の仮字五体の版[板]下をかく。

232頁 / 369頁

1867年三月二十三日〔4.27〕 けふへぼん^{デクシヨネリイ}対訳辞書にあたらしく名をつけてください。ほんのとびらがみにかくやうによい名をといふから和英詞林集成とつける。235頁 / 370頁

1867年三月二十五日〔4.29〕 雨ふる。和英語林集成のとびらがみのはんしたをかく。双鉤でかいたがよくできた。詞の字を語に改めていちりんねあげをした。へぼんだら五十枚くれる。これまで久しくほねを折て此ほんを手伝てこしらへたからおれいにくれるなり。242頁 / 371-372頁

5種類の字体を版下に書いた。これは和英辞書に収録される「A TABLE OF JAPANESE KANA 日本語仮名一覧表」に使うためだ。万葉仮名といってもそれが辞書全体に使用されたわけではない。日本語にはこんな文字があります、と紹介するため一覧表にした。

ヘプバーンが岸田に書名をつける、というのは奇妙に聞こえるかも知れない。だが、もとは英語の辞書だ。*JAPANESE AND ENGLISH DICTIONARY WITH AN ENGLISH AND JAPANESE INDEX* とヘプバーンは決めている。日本で発行するから、その日本語訳が必要だった。岸田がそれまで称していたのは「和英対訳詞(字)辞書」だ。それを変更して『和英詞林集成』にする。さらに文字をいれかえて『和英語林集成』に決定した。「詞林(4厘)」から「語林(5厘)」へ「いちりん(1厘)ね(値)あげをした」としゃれたわけ。あまりにも広く知られている。引用するのにかなり躊躇する。ただ、つけ加えれば、ことば遊びができるほど岸田は気持ちに余裕があった、と私は理解する。双鉤は、輪郭だけの中抜き字体をいう。

岸田がヘプバーンから辞書を手伝った礼としてもらった50ドルは、当時どれくらい価値なのか。

美華書館での植字に、1ページあたり2ドルを支払っている、とヘプバーンは書いた。ならば、辞書25頁分になる。岸田は、その金額が多いとも少ないとも書いていない。

人件費をもとに比較すればどうか。

ヘプバーンは、神奈川で日本人を雇ってその給料を払っている。書簡にこうい

部分がある。「1861年5月17日 寺の家賃は一年約百七十五ドルです。雇い人の手当は四十五ドル、医薬その他は百ドルから百五十ドル以上かかり、概算で、三百七十ドルになります。この目的のために以上の金額をわたしに渡して下さいますか、本当にそれだけの支出に価するものだとわたしは考えます」(84頁、全集84頁)

雇い人の手当が45ドルという。それから見れば、岸田に与えられた編集協力費50ドルは、日本の雇い人とほぼ同じ水準になる。

あるいは、つぎのようなヘブパーンの書簡はどうか。和英辞書初版出版に要した経費について報告する。

1872年4月11日 さて、前にも申し上げたように、書物をミッション本部に渡し、その財産とするように提案しています。すなわち、この書物を出版し、その出版に要したわたしの一切の経費を差し引いた後、その残額をミッションの会計に入れるのです。第一版の販売によって生じた利潤の正確な計算はつけなかったのです。それはただわたし個人のことだからと思って全く計算を記録しなかったのです。出版した年にその利益の中から千ドルを妻にプレゼントとして与えました。それは妻が始めから終りまで忠実に仕事を助けてくれたからです。今、妻の分を保留していただき、残額ほぼ四千ドルをこの第二版の出版のために用いたいです。ノ上海での経費は仲々かかります、ミッション本部は他の費用以外一ヵ月百十ドルしか下さらないからなのです。わたしは勘定をつけておいて、この仕事を終わったとき計算書を提出いたします。242頁、全集259-260頁

辞書初版出版に要する経費は、支持者からの支援とヘブパーンの自費によってまかなわれた。岸田の上海行に要した交通費、滞在費、食費なども、ヘブパーンが負担したのだろうとは推察する。しかし、詳しい事情はよくわからない*9。

岸田の日記には、必要経費についての説明がみあたらない。書いた部分はあったが今は行方不明だとも考えられる。結局のところ、50ドルの編集協力費である。ヘブパーンが妻に1,000ドルを与えたのに比較すれば、差がありすぎる。岸田の貢献もヘブパーンからみると、金銭になおしてそれくらいの価値だった。

当時の美華書館責任者は、すでに何度も名前が出ているギャンブルである。岸田日記には「姜先生」という表記で登場する。ギャンブルが、姜別利(また姜關理*10)

と漢訳されるところからきている。

1867年正月十六日〔2.20〕 ほかにもしらぬ人々をつれて吳淞のかしを西南へ小東門外までいて姜先生の宅へよる。酒などを[×]こちさうになりて……63頁 / 321頁

1867年正月十六日〔2.20〕 (樽本注：岸田の友人が)姜先生の處へいて活字板をするのも見たといふから……66頁 / 321頁

1867年正月廿七日〔3.3〕 小東門外姜先生の處へいてめしをくふて……101頁 / 332頁

岸田は、ギャンブルの住居を訪れることがあった。彼が日記に残したギャンブルの名前は、以上だけ。辞書の印刷について話が出たかもしれないが、記録に残すまでではないと考えたか。あるいは、岸田の興味は酒食事のほうにあったのか。よくわからない。

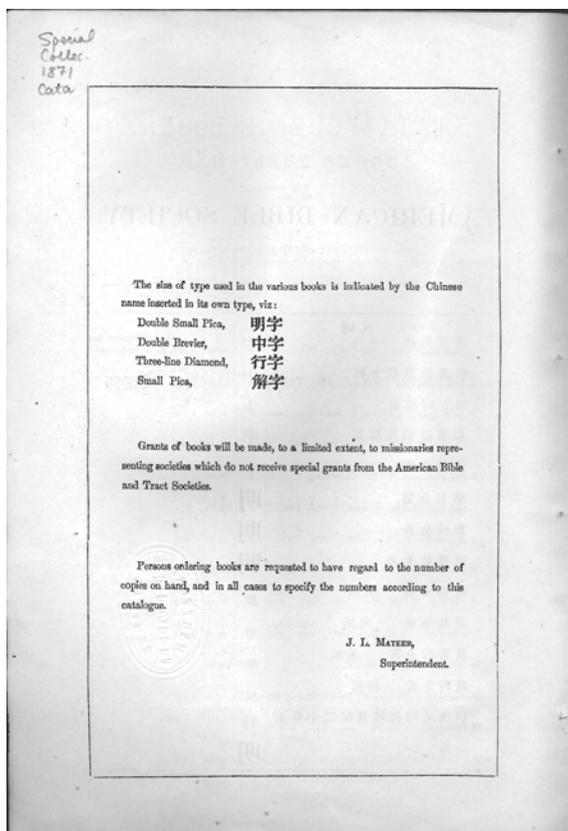
上に見える「姜先生の處へいて活字板をするのも見た」とは、活版で印刷している現場を見学した、ということだ。ギャンブルの住居と美華書館はほとんど同じ場所にある、と考えていいだろう。

日本語訳『真理易知』の印刷

話が前後するが、同じくヘプバーンの1867年1月25日付の書簡からもう少し引用する。

ガンブル氏はわたしが三年程まえに版木にしておいた小冊子(訳注、「真理易知」のこと)を印刷しております。ガンブル氏はわたしが日本で作ってもって来ている版木から、かなり立派な活字を作りました。ガンブル氏は母型を作ったので、わたしどもの欲しいものは何でも日本語で印刷することができるようになりました。180頁、全集202頁

訳注にある『真理易知』とは、マッカーティー(Divie Bethune McCartee, 漢名麦嘉締培瑞, 1820-1900)が中国人向けに漢語で書いた著作だ。マッカーティーもヘプバーンと同じくアメリカ長老派教会の宣教医師。1844年中国マカオに到着。のち



美華書館『在庫目録』1871（部分）

寧波に移動した*11。寧波に美華書館の前身である印刷所が置かれていたとき、マッカーティーは3代目責任者をつとめている。

『真理易知』は、ヘブバーンが監督し助言をあたえて日本語に翻訳した39丁の小冊子だった。翻訳したのは1862年だ。同年12月9日付書簡にこう書いている。

「わたしは最近「真理易知」というマカルテーの書いた中国語の小冊子を翻訳いたしました。この書はわが長老派のミッション印刷所の出版目録に出ております。ここ

で木版印刷して出版したいと考えております。多分「キリスト教書類会社」(Tract Society)の援助で出版できましょう」(118頁、全集140頁)

『真理易知』が掲載されているその『出版目録』は、1863年版らしい。私がウェブ上で見る『在庫目録』は、1871年版だ*12。

収録された各種書籍には、値段と在庫部数が明示されている。美華書館は、印刷するだけでなく販売もした。書店を兼ねている。

印刷依頼者別にまとめられているこの『在庫目録』には、つぎのような記載がある。

『真理易知』は、キリスト教小冊子出版会(Tract Society)および長老派教会外国伝道局(Presbyterian Board of Foreign Missions)の部にある。使用言語は「文理 WEN LI」、すなわち文言だ。

9頁 102 真理易知

Easy Int. to Christian Doct. 12mo. 36p. 1867 明 .90 31 D. B. McCartee

「12mo.」は、判型でいう十二折り判 (twelvemo) のこと。「明」は活字の大きさ (Double Small Pica) を意味する*¹³。活版印刷だからヘブバーンが持ち込んだ木版とは違う。100部につき0.9ドルの価格で販売し31部の在庫がある。

『真理易知』初版16丁は、1853年に寧波で刊行されたという。ゆえに美華書館のものは、何度目かの重版だ。

版木にしたのは「三年程まえ」とヘブバーンは書く。正確にいえば、1863年のことだった。アメリカ本部ラウリー宛の同年3月26日付書簡には、版木を制作中だとある。4月29日付では、未完成で版木師のてもとにある、という。それを上海の美華書館に持ち込んで印刷刊行した。

奇妙なことだと思われるかもしれない。版木になっているものならば、日本において印刷できたであろう、と。だが、当時の日本は江戸幕府の末期である。見つければ禁止されるとわかっていた。頒布禁止になるばかりか、関係者の身に危険がおよぶ可能性もある。

同1863年10月18日付書簡につぎの語句がある。「わたしは寧波のマカルテ^{ニンボー}博士の書いた中国語の小冊子を翻訳し、出版できるように版木に刻んであります。けれども、日本語の教師を失う心配から、いやむしろその教師の生命を危くする恐れから、それを印刷できなかったのです」(140頁、全集156頁)

ヘブバーンは、1873年のニューヨークにおける講演原稿でもつぎのように説明している。「上海にいた間に日本語の最初のキリスト教の小冊子五千部を印刷しました。それはD・B・マカルテ師が中国文で書いた「真理易知」の翻訳です。その小冊子はひそかに横浜で版木にしたが、幕府を恐れてこれを印刷する日本人が得られなかったので版木のまま上海に持って行って、そこで印刷したのです」(249頁、全集266頁)。そのほか、1864年2月11日付書簡にも聖書の木版印刷に関連して「命がけ」(144頁、全集166頁)などと説明する。

『真理易知』は、漢字とヒラガナを使用して木版に彫られた*¹⁴。そうすると、「ガンブル氏はわたしが日本で作ってもって来ている版木から、かなり立派な活字を作りました」という「版木」は、それとは別物になる。ヘブバーンらが必要としたのは日本語カタカナであったからだ。

以上のように、『真理易知』が印刷されているとヘブバーンが報告したのは、1867年1月25日付の手紙だった。

木版で印刷されたヘプバーンの該翻訳書も、前出『在庫目録』に収録されている。

10頁 128 真理易知 日本字 木板

Easy Int. to Christian Doct. 12mo. 78p. 1868 Jap. 3.90 41 J. C. Hepburn

木版だから活字の大きさは関係がない。そこは「Jap.」とだけ記載される。「3.90」も100部あたりのドル価格。41部の在庫がある。印刷年は1868年になっている。ヘプバーンの1867年1月25日付手紙では、印刷中だとあった。印刷時期は、遅くとも1867年の年内だろう。目録の記載は、時期がすこしずれている。

ヘプバーン辞書第2版と美華書館

ヘプバーン辞書は、初版発行が1867年だった。それから数えると4年後の1871年、該辞書の第2版を同じく上海の美華書館で印刷することになる。

その間、1869年にギャンブルは美華書館を辞職した。責任者は、別人に交替している。ヘプバーンの手紙にはギャンブルの名前が出てこない。それが理由だろう。問題が発生したのは、この辞書第2版を印刷したときだ。

アメリカ本部のラウリーにあてたヘプバーンの報告は、意外なことにその時の模様を説明していない。

1871年12月8日 上海にきて三週間は印刷の準備に過ぎました。やっと昨日から印刷に着手しました。一日八ページばかり進めるとすれば大体四ヵ月ここに滞在していなければなりません、わたしには喜ばしいことです。ノミッション印刷所は現在、大勢の職人を使って非常に多忙を極めております。そして、わたしが数年前持って来た電気製版の活字で立派に日本字を入れた英和辞書を印刷し終ったばかりです。この辞書は八百ページ以上の大作です、ウィリアムス博士もまたその著作「英華分韻撮要」を出版しております。それは、ほぼ千五百ページの大冊でしょう、非常に必要な書物です。239頁、全集257頁

ここのミッション印刷所も、いうまでもなく美華書館のこと。アメリカ人宣教師たちは、ミッション印刷所（AMPMP）と呼ぶのが普通だ。漢字名称は、あくまでも中国人のためにある。

12月8日付で「上海にきて三週間」が経過していた。ヘプバーンの上海到着は、およそ1871年11月中旬であることがわかる^{*15}。到着月を視野にいれているのは、美華書館の責任者人事に関係してくるからだ（後述）。

4年前では2日に8ページから1日6ページの印刷速度だった。今回はそれが1日8ページになった。印刷速度は確実に増加しているように見える。

アメリカ本部あての書簡は、公式なものと考えていいだろう。印刷所が「大勢の職人を使って非常に多忙を極めております」と書いてあるところを見れば、辞書の印刷は順調にすすんでいるような印象を受ける。だが、実はそうではなく、ヘプバーンの和英辞書とは別のことがらで印刷所は多忙を極めているのかもしれない。

よく読むとヘプバーンの書いた文面に理解しにくい記述があることに気づく。

和英辞書第2版は、「やっと昨日から印刷に着手しました」とある。ならば、「立派に日本字を入れた英和辞書を印刷し終ったばかり」というのは何を指すのか。ヘプバーンの和英第2版とは別の英和辞書らしい。書名からして異なる。だが、これについてもそれ以上の説明はない（後述）。

もうひとつおかしなことがある。「ウィリアムス博士もまたその著作「英華分韻撮要」を出版しております」だ。手紙の流れからいえば、ウィリアムス（Samuel Wells Williams, 1812-1884）の『英華分韻撮要』も美華書館で印刷したように読める。

該書の書名は、*A TONIC DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE IN THE CANTON DIALECT* という。そこからわかるように、広東語辞書だ。印刷されたのは広東省城で、しかも1856年のこと。1871年よりだいぶ以前の辞書が、そのうえ美華書館が印刷していないものが、どうしてここに出現するのか、と思わぬでもない。

ウィリアムスの著書のうち美華書館で印刷したものは、たしかにある。*A SYLLABIC DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE, ARRANGED ACCORDING TO THE WU-FANG YUEN-YIN WITH THE PRONOUNCIATION OF THE CHARACTERS AS HEARD IN PEKING, CANTON, AMOY, AND SHANGHAI*, (SHANGHAI: American Presbyterian Mission Press, 1874) だ。しかし、この印刷年はのちの1874年であって1871年ではない。いずれも該当する事実がないから不思議に思う。

ヘプバーンは、上海で印刷をはじめたばかりだからか、アメリカ本部にむけて具体的な状況は書いていない。いや、印刷が完了して日本横浜にもどってから同様だ。

1872年7月22日付「上海で仕事を無事完了し、二十日の土曜日、大喜びで帰浜いたしました。予定以上、上海に滞在しましたが、炎暑がことにはなはだしく、大変しのぎにくい毎日でした」（243頁、全集260頁）。上海は炎暑だったという。

弟スレーターへの手紙

彼が弟スレーター（Stator Clay Hepburn, 1819-1895）にあてた私信では、様子が異なる。

ヘプバーンは、上海に長期滞在することを最初は苦にしていない。ラウリーには、上海滞在は「わたしには喜ばしいことです」と書き送っているほどだ。だが、結果からいうと、第2版の印刷はそれほど順調にはすすまなかった。長い期間の作業をへて印刷を終わったあとだ。当時の上海美華書館の内部状況が、彼の書簡に違ったかたちで出現する。

和英辞書第2版の刊行が終了し、ヘプバーンが上海より日本横浜にもどってからの手紙である。以下は、高谷道男編訳『ヘボンの手紙』よりの引用。

1872年8月5日 わたしが上海にいた時、君（樽本注：弟スレーター）からの手紙を見たのですが、仕事に追われていたので、返事を書くひまがなかったのです。辞典の出版を終わり、約二週間前にこの家に着きました。上海に八ヵ月以上もいましたが、これほど困難な仕事は今までにありませんでした。わたしはそこで校正刷りを訂正したほかに、かなり多くの原稿を書きました。それで、たびたび病気になり、とても弱って、やっと腹ばいで動けるほどでした。試練の時でした。しかし、主はわたしを無事に守ってくださいました。111頁

上海の風土は、ヘプバーンの身体にはあわなかった。前回は赤痢と間歇熱だったし、今回は炎暑と過労だ。

1872年4月11日付ラウリーあての書簡で補足する。「上海に来てからわたしの健康はよくありません。痼疾の瘧おこりと発汗に悩まされております。上海の冬の寒さと湿気の多い気候のため妻は肺臓と気管とをやられ、ここの医者おこりの忠告によって妻を香港にやることにいたしました。最近かなりよくなって帰ってきました」（243頁、全集260頁）

ヘプバーン辞書第2版が実際に刊行されたのは、同1872年の7月だ。その編集

に力を注ぐあまり病気にかかったのでは作業の進行が遅延するのも無理はない。これにつづいて美華書館の内情に触れている。興味深い。

ミッションの印刷所も、またひどく混乱していました。有能な実務的な人物を切実に求めております。印刷所の仕事をさせるのに、あのような人をよこすとは全くあきれたものです。ミッションの印刷所では昨年以來、四人のちがった主任者を雇っていたが、そのうちの三人は教職者で、一時的にそこにただけで、印刷に特別の関心はなかったのです。今もその印刷所にいる一人は傲慢で、でくのぼうです。有用どころか邪魔になる人です。もしわたしが辞典を印刷するために上海に行かねばならぬとしても、決して再びあそこではしません。ともかくも全く疲れてしまいました。どこか他の印刷所にかえたいと思います。

111-112頁

美華書館の組織内部がひどく混乱していた、という。もう2度とあそこでは印刷しない、というほどの混乱とは、何なのか。

ヘプバーンの上海滞在期間は、1871年11月中旬から翌1872年7月の間だ。彼はひどく腹を立てている。だが、混乱していたというだけで、具体的な記述があるわけではない。

日本語活字についていえば、辞書初版を印刷したとき、ギャンブルが母型を作った。第2版ではそれほど不自由はなかったはずだ。ヘプバーン自身が、「そこで校正刷りを訂正したほかに、かなり多くの原稿を書きました」とのべている。大量の訂正、追加を行なったらしい。

辞書の編集と印刷には、膨大な労力が要求される。作業の一部分が滞れば、全体の進行に影響をあたえる。編集上の修正を多くほどこせば、それだけ余分に時間がかかってしまうのは当然だろう。

しかし、ヘプバーンが見るところ、混乱の原因は校正、書き換え、加筆を行なった彼自身にはない。そういう認識だ。彼にいわせると、いらだちの原因は主任者4名にある。短期間にくるくる替わる。彼らは印刷に関心はなかった。「教職者」だというのだから、やはり責任者を指すのだろう。しかも、「あのような人をよこす」と書いている。中国に派遣されているアメリカ長老派教会の人間ということになる。

日本で言及されるのは、だいたい以上の情況までだ。ヘプバーンは困難を克服して美華書館での印刷を推し進め完成させた。無能な当時の美華書館責任者たちだった。彼らとは違って、今は退職している、有能なギャンブルへの思いが強調される。

ヘプバーンは「あのような人」「四人のちがった主任者」と書くだけ。また「今もその印刷所にいる一人は傲慢で、でくのぼうです」「邪魔になる人です」などは、やはり私信でしかのべるほかなかったものらしい。それだけで、アメリカ長老派教会の関係者ならば、すぐに誰と特定できたのだろうか。

こういう些細で微妙な箇所は、翻訳者も注記することを避けた。ほめるのには名前を出すのが、けなすのに名前は不必要だという判断なのだろう。

ところが、記録を残しているのはヘプバーンだけではなかった。あるひとりの人物、かつて美華書館の責任者であった人がいる。この人の伝記に当時の情況に言及する部分がある。

美華書館の責任者たち

その内容を紹介する前に、美華書館の責任者たちにどういう人々がいたのかを確認しておこう。以前に紹介した資料だ。今でもそれほど知られていないように思う。それにもとづき作成しなおした。

当時の美華書館責任者の一覧表（部分）である*16。

美華書館責任者一覧表（部分）

もとの一覧表は、名前と在任期間しか書かれていない。今回、つぎのように補充した。

就任の順番 / 名前 / 在任期間 / 所属 / 派遣元の順に記述する。

所属についてもマックギリヴェイ MacGillivray の該書所収 “Missionaries(1807-1907)” にもとづいている。派遣元については、ワイリー Alexander Wylie, *MEMORIALS OF PROTESTANT MISSIONARIES TO THE CHINESE*, (SHANGHAE: American Presbyterian Mission Press, 1867 / 電字版)によった。参照：G. Thompson Brown, *EARTHEN VESSELS AND TRANSCENDENT POWER American Presbyterians in China, 1837-1952*, NEW YORK: Orbis Books, 1997

関連する事項、たとえばヘプバーンの上海滞在なども 印をつけて挿入する。 印は美華

書館に関して整理するために配置した。印刷所の所在地、当時の名称を補う。上海内での移転については、別に説明する。

略号は以下のとおり。

A P Mは、American Presbyterian North アメリカ北長老派教会

B F M P Cは、Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church 長老派教会外国伝道局（漢語：美国北長老会）

1844 マカオ 華英校書房

初代コウル Cole, Richard

1844-1846 / R A P M (樽本注：American Reformed Presbyterian Missionだろ) 1844 / B F M P C

1845 寧波 華花聖經書房（別に華花印書局）

2代ルーミス Loomis, Augustus Ward

1847 (Holt:8.24) - ? / A P M1844 / B F M P C

3代マッカーティー McCartee, Divie Bethune

? -1848 / A P M1844 / B F M P C

4代コーター Coulter, Moses Stanley

1849-1852 (一説にHolt:1853) / A P M1849 / B F M P C

5代ウェイ Way, Richard Quarterman

1853-1857 (一説にWylie:1853-1858) / A P M1884 / B F M P C

6代ギャンブル Gamble, William

1858-1869 / A P M1858 / B F M P C

1860 (一説に1861) 上海 美華書館（別に美華書局、また美華書院）

1863 ブラウン 『日英会話篇』印刷

1869 (正月) 薩摩辞書第3版印刷

1866-1867 ヘプバーン夫妻、岸田吟香上海滞在、和英辞書初版印刷 (May, 1867.序)

7代ウェリー Wherry, John

1869 / A P M1864 / B F M P C

8代バター Butler, John

1870 / A P M1868 / 派遣元不明

1870.10.20 上海 第1回中国長老派教会大会 (Synod of China)

9代マティアー Mateer, Calvin Wilson

1870 / A P M1864 / B F M P C

1871正月 岡田好樹訳『官許仏和辞典』印刷(1871.2序)*17

10代マティーア Mateer, John Lowrie

1871-1875(一説に1876)/A P M(North)1871/(B F M P C推測)

1871十月(新暦11.13-12.11)薩摩辞書第4版印刷

1871-1872 ヘブバーン夫妻上海滞在(11月中旬より)、和英辞書第2版印刷(July, 1872.序)

1872 島田、穎川『和英通語捷徑』

1873 薩摩学生『独和字典』

1875.9 北京路清遠里口(北京路18号)に移転

11代ホルト Holt, William S.

1876-1880/A P M(North)1873/派遣元不明

12代フィッチ Fitch, George F.

1881/A P M(North)1870/派遣元不明

13代ゴードン Gordon, A.

1881/所属不明/派遣元不明

14代ホルト Holt, William S.

1882-?/A P M(North)1873/派遣元不明

15代ゴードン Gordon, A.

?-1883/所属不明/派遣元不明

16代ファーナム Farnham, John Marshall Willoughby

1884-1887/A P M1860/B F M P C

17代フィッチ Fitch, George F.

1888/A P M(North)1870/派遣元不明

扱った資料の出版年限を超えた人物であるばあい、記録がない。そこは「不明」とした。

また、2代目ルーミスの在任時期を「1847-?」と書き、3代目マッカーティーのそれを「?-1848」と示したのは、理由がある。原資料では1行に2名が連なっており「1847-1848」としているからだ。1847年から1848年までの期間はわかる。だが、いつ引き継いだのか、その詳細を特定することができない。「?」で示した理由だ。

また、その在任期間は、実際とは違うばあいもある。厳密に記入されているわけ

ではなさそうだ。あくまでも目安と考えたほうがいいだろう。

この1行2名の連記は、ほかに8代目バトラーと9代目C・W・マティーア、12代目フィッチと13代目ゴードン、14代目ホルトと15代目ゴードンに見られる。

アメリカ長老派教会の印刷所は、1844年中国マカオにおいて開設された。初代責任者はコウルだ。当時の漢語名称は華英校書房という*18。翌1845年、寧波に移転し華花聖經書房（別に華花印書局*19）となる。さらに1860年（一説に1861年）、上海に移り現在でいうところの美華書館（別に美華書局*20、また美華書院*21）になった。

中国人むけの漢語表記は変化した。しかも、名称の一部がゆれている。だが、英語の American Presbyterian Mission Press（American が表示されないばあいもある）は、基本的に変わらない*22。

上の一覧表の各人について所属と派遣元を示した。その理由は、美華書館の責任者をつとめた人々の全員がアメリカ長老派教会に所属することを確認したかったからだ。

6代目ギャンブルも他の人々とおなじく宣教師の扱いになっている。

派遣元も同様である。例外は、13代目と15代目の2回をつとめたゴードンくらいだ。ただし、彼もまったくアメリカ長老派教会と無縁であったわけではない。ゴードンは、12代目フィッチを手助けした。それを契機として該教会に推薦されて入会している*23。最初から信徒ではなかった方が珍しい。

さきに説明したように、1行にふたり連名のものがある。責任者がふたり同時に就任していると以前は考えた。違うらしい。短期間であってもあくまでも責任者はひとりだということ。

それを見れば、6代目がギャンブルだ。その期間は、1858年から1869年まで11年間にわたる。上海に移動した1860年（一説に1861年）と、ヘプバーンが和英辞書の初版原稿を持ち込んだ1866年のふたつともに関係している。

在任期間が長い人物は、一覧表を見れば、ギャンブルひとりが群を抜く。単純に数えて在任4年以上の人物は、5代目ウェイ、10代目J・L・マティーア、11代目ホルトくらいのものだ。

ヘプバーン辞書第2版の印刷は、1871年だった。上の一覧表をたどると、そのときの10代目責任者は、J・L・マティーアである。

6代目ギャンブルが辞任した1869年から、7代目ウェリーになる。同じ1869年

に交替しているのは、在任期間が短いことを意味する。同様に、8代目バトラーも短期間勤務のあとに、9代目C・W・マティーアへ受け継がれた。さらに前出10代目J・L・マティーアへと続く。

ヘプバーンは、「昨年以来、四人のちがった主任者」と書いている。「昨年」を厳密に考えると1870年になって3人だ。もう1年ずらせて1869年にさかのぼれば4人になる。ギャンプルの任期に比べれば、いかにも短期間だ。

7代目ウェリー、8代目バトラー、9代目C・W・マティーア、10代目J・L・マティーアたちが、ヘプバーンのいう「四人のちがった主任者」に該当する。この4人のなかに同姓の人物がふたりいる。マティーアである。

マティーア兄と美華書館

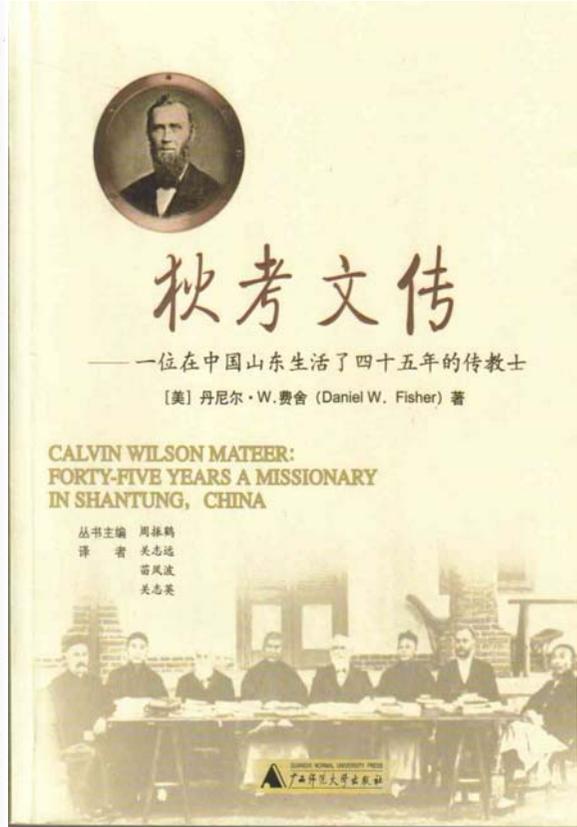
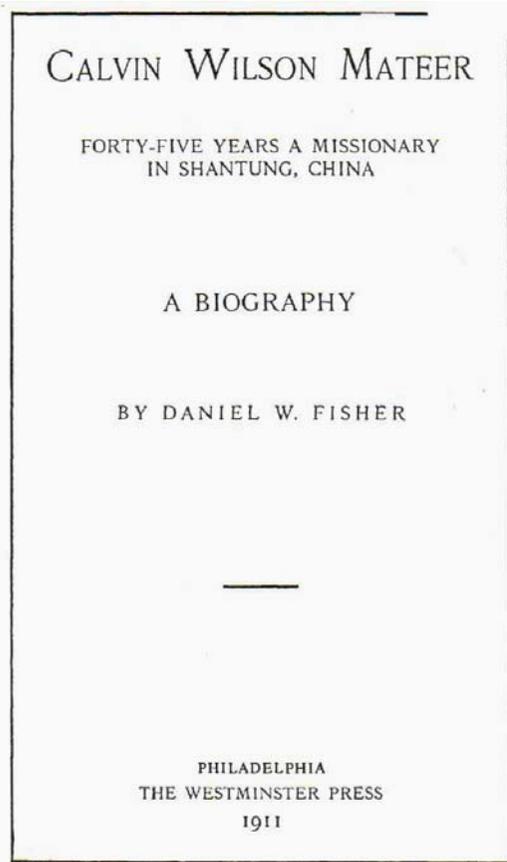
マティーアの両親はアメリカ長老派教会の信徒だった。マティーアの子どもたちは、五男二女の合計7名だ。ごく簡単に紹介する。「長男」などは原文についていないが、便宜のため私が補って使う。生卒年も記入した。

長男カルヴィン (Calvin Wilson Mateer, 1836-1908) と四男ロバート (Robert McCheyne Mateer, 1853-1921) は、ふたりとも宣教師になり中国山東で布教につとめた。三男ジョン (John Lowrie Mateer, 1848-1900) は、上海で5年間長老派教会伝道印刷所 (樽本注: 美華書館) の責任者をつとめた。そのあと北京の会衆派教会印刷所 (Congregational Press) *²⁴に勤務し当地で死亡した。次女リリアン (Lillian Ellen Mateer, 1858-1897) は中国登州の女学校で教え、バプティスト教会の宣教師と上海で結婚した。次男ウィリアム (William Diven Mateer, 1843-1914) は、宣教師になりたかったが、不本意ながら商業の道に進んだ。長女ジェニー (Jane (Jenny または Jennie) Mateer, 1837-1926) は、長老派教会の牧師と結婚、中国へ行く予定だったが健康上の理由で故郷に留まっている。五男ホレイス (Horace Nelson Mateer, 1855-1939) はオハイオのウースター大学教授になった*²⁵。

美華書館の9代目責任者は、長男カルヴィンである。つづく10代目は三男ジョンだ。責任者の地位は、マティーア兄弟の長男から三男に引き継がれたことが確認できる。

長男カルヴィンに注目する。

アメリカ長老派教会が、結婚後まもない長男カルヴィンたちを中国山東登州 (今の蓬萊市) に派遣したのは、1863年だ。彼は27歳だった。長男カルヴィンは、その



Daniel W. Fisher、扉

関志遠、苗鳳波、関志英訳、表紙

地での宣教、学校の設立と運営、中国人向け理科系教科書の編纂、また漢語教科書の編纂などに従事した。聖書の漢訳である官話和合訳本の翻訳責任者に選ばれたことでも有名だ*26。

長男カルヴィンについては、伝記が書かれている。フィッシャー Daniel W. Fisher 著『C・W・マティーア伝』*27だ。

長男カルヴィンは、登州における活動ですでに手一杯だった。その多忙な彼が美華書館の責任者にならざるをえなかったのには、あるいきさつがあった。以下は伝記による（152頁、漢訳97頁）。

アメリカ長老派教会総会の命令によって中国長老派教会大会（Synod of China）が組織されたのは1870年秋である。同年10月20日、上海で第1回大会（上海大会と略す）が開催された。ちなみに、2回目は1871年寧波で、3回目は1874年芝罘（今の

煙台)において開かれる。

大会において、参加者のなかから美華書館の責任者を選出しなければならなくなった。長男カルヴィンが、まず辞退する。さらに、数人に依頼がなされたがすべて断われ、結局のところカルヴィンに廻ってきた。1年だけ、また必要なときに登州に帰ることができる、という条件をつけて、彼はしかたなく承知した。

上の責任者一覧表に9代目長男カルヴィンの責任者就任は1870年とある。34歳のときだ。

上海大会の開催が1870年10月20日だった。1ヵ年というならば、実際の在職期間は、1871年をすぎてその年末に近いだろう。上の記録とは少しのくいちがいがあるように思う。伝記では、最終的には1872年8月ようやく登州にもどったとする(伝記153頁、漢訳97頁)。1872年の8月まで責任者の地位にあったという意味ではない。長男カルヴィンは、必要に応じて登州にもどっていた。また、責任者ではなくなってからも上海に出向いたことを後で説明しよう。

9代目長男カルヴィンの働き

伝記によると、長男カルヴィンが彼の能力を発揮したのは、経営と印刷の両方面だった。要約する。

彼は、印刷所内に会計課、職務課、責任者のための住居、工員(すべてが中国人)の宿舍と教会堂、またその他の施設をつくった。その結果、彼が印刷所を辞めるときには、それは健全で安定した効率のよい組織となった(伝記155頁、漢訳99頁)。

この説明によれば、美華書館の内部組織が整備されたのは、長男カルヴィンが辞職する前だ。彼の在任期間は短い。時期は特定しやすい。1871年になってからだと考えていいだろう。いうまでもなく、美華書館が上海県城小東門外にあった時期に重なる。教会堂および「責任者のための住居」が、長男カルヴィンによって印刷所内に作られた。ならば、ギャンブルが責任者だった1869年まで、それは存在しなかったことを意味する。はたして、教会堂とギャンブルの住居は、書館の敷地内にはなかったのか。

教会堂と「責任者のための住居」に関して、ファーナムの証言がある。

上海県城小東門外の地域が火事で焼けたあと、美華書館はその一区画を購入した。黄浦江から運河北側沿いに小東門外にいたる東西方向の細長い土地だ。相当に広い。

川（黄浦江）に面して、カルバートスン氏のための家が建てられた。運河の北側にそって県城までが印刷所の建物で、西の端に教会堂をともない、その向こうの場所は責任者のための宿泊施設だった。^{*28}

焼け跡地だ。必要な建造物は新しく建てる必要がある。印刷所の建物 the Press buildings が複数形だから、いくつかの棟にわかれていたことを示している。広大な敷地に建築物が1棟である必要はない。すると、印刷所とは別に教会堂があったとしてもおかしくはない。最初から複数の（そうとして）建物が、同時に建築されたかについても不明だ。

工員のための教会堂は、印刷所建設の早い段階から敷地内に置かれていたと考えられる。ここが、長男カルヴィンの説明と異なる。美華書館の中国人工員は、長老派教会の信徒だ。礼拝は、毎日の就業前に行なわれる。教会堂は印刷所内にあったほうが、宣教師の側からいっても便利だったろう。

「場所」と訳しておいた原文は、the rooms である。空間、余地などの意味があるが、そこにはじめから建物があったとも思われない。建設優先順位の問題だ。美華書館、すなわちアメリカ長老派教会伝道印刷所が最初に備えるべき施設は、まず操業できる印刷工場と教会堂のはずだ。印刷に不可欠な工員が宿泊する設備も、早くに用意する必要がある。教会堂と同様に重要だ。だから、責任者の住居建築があとまわしになっても不思議ではない。最初は予定地にしておいて、印刷所全体の機構が整備されるにともない責任者用の住居がたてられたとも考えられる。

責任者用住居が後年整備されたとしても、すくなくとも長男カルヴィン以前ではないか。岸田吟香が訪れたギャンブルの住居は、美華書館にあったように読める。

つまり、美華書館の教会堂と責任者用住居については、『C・W・マティーア伝』の著者が勘違いした、と私は考える。おいおい見ていくが、伝記の中身は事実とそれほど異なっているわけではない。ここは、数少ない勘違いのひとつだ。

長男カルヴィンは、上海美華書館において、印刷方面にも才能を発揮した。具体的にいうと、日本語の辞典を印刷するにあたって活字母型を作成した。これにはかなり苦労した、と彼自身がいう。

印刷に関して経験はなかったはずの長男カルヴィンだ。しかし、それをもってまったくの素人というわけにはいかないらしい。彼は、子供のときから器械を製作し

それを動かすことに興味をいただいていた。中国で生活するのに必要な発電機が故障したとき、彼はみずからそれを修理している。山東登州で必要とする機械は、自分で作らなければならなかったと容易に想像できる。妻のエイダによると、彼は、発電機のほかに、蒸気機関、風車、水道設備などをてがけた。各種工具をそろえた作業場をもっていたという。

長男カルヴィンのことばを紹介する。彼は、美華書館の責任者になった直後、ある困難に直面した。

私は日本語辞書をはじめなければならなかった。そしてこれはとてもやっかいな仕事だった。私の前任者は、自分ではできないことを約束したのだ。工員たちは印刷をするために待っていたが、しかし、私たちはその仕事をするための印刷用紙をイギリスに注文するしかなかった。また、ウェブスター辞書のすべての発音記号を差し込まなければならず、しかも私たちはその活字も母型も持ってはいないのだ。私は木材に文字を彫り、母型を作成した。これは極めて困難なことだった。いくつかの文字は6回、あるいはそれ以上も彫ったが、結局のところ完全というのにはほど遠かった。また、楽譜活字を一組彫ったものの、すべてを適切に彫ることに時間と苦痛をともなった。これもなんとか母型をつくった。最終的に私はそのどちらの期待にもこたえることに成功したのだ。伝記155頁、漢訳99頁

楽譜活字は、楽譜付きの賛美歌本を印刷するために必要だったのだろう*29。

長男カルヴィンは、美華書館では日本語辞書のために種字を彫り活字母型づくりまでやったと書いている。持ち前の好奇心とめぐまれた才能によって、印刷分野でも深いところに接触していたとわかる。まったくの未経験者であれば、活字の母型を作ることなどしないだろう。さらに、印刷に興味を持たなければ、その発想すら出てこないはずだ。

では、彼が上で述べている日本語辞書とはなにか。

その手がかりは、責任者となった1870年という年と、文中に出てくるウェブスター辞書だ。時期的に見て、ヘプバーンの和英辞書第2版ではない。ヘプバーンが「立派に日本字を入れた英和辞書を印刷し終ったばかり」と指摘したこの英和辞書だ。

もうひとつの日本語辞書

長男カルヴィンの美華書館在任期間を見れば、ちょうどヘプバーン和英辞書の初版と第2版には含まれている。ヘプバーンの上海滞在と重なる時期があるように思う。

ヘプバーンの書簡には、マティーアの名前がたしかに出てくるのだ。

わずか1行にすぎないが、次のようにある。「1871年12月8日 ホェリー氏はマテア氏の不在中今暫くここで働いておられます」（240頁、全集258頁）

ここでいう「ホェリー氏」は、美華書館の7代目ウエリー John Wherry だ。「不在中」とは、長男カルヴィンが登州に帰っていることを意味している。マティーアの名前を出していることによって、ヘプバーンには彼との面識があったことがわかる。また、彼が上海を留守にすることもある、とヘプバーンは知ってもいる。では、長男カルヴィンは、1871年12月8日の時点で責任者の地位にあったのか。ここだけをつかまえて断定はできない。

周囲の状況を以上のように把握して、長男カルヴィンが格闘していた日本語辞書を特定しよう。

何かといえば、薩摩学生（前田正毅、高橋良昭）編『大正増補和訳英辞林』（美華書館。「序」明治四歳辛未（1871）十月。第4版）にほかならない。

私がそう判断する理由は、その日本語序文のなかにある。該当する箇所は次のとおり。

今片仮名ヲ省キウエブストル氏ノ辞書ニ據テ是ニ易ルニ^{エキセント}音符並ニ^{シレブル}字綴ヲ以テス*30

「ウエブストル」は「ウェプスター」だ。この単語が鍵となって長男カルヴィンの証言と薩摩辞書が一致する。彼の在任中に印刷刊行された。

美華書館の『在庫目録』で確認する。著者からの依頼印刷の部に収録される。

14頁 197 和訳英辞書

English Jap. Dictionary, 8vo. 830p. In Press 5,000 Japanese.

書名の一部は異なって記載されている。しかし、『和訳英辞林』に間違いはない。「8vo.」は、本の大きさ、つまり八つ折り判 (octavo) のこと。日本人の著作だから「Japanese」と行末に表示がある。薩摩辞書は、5,000部の予定で、印刷中だと書かれている。価格設定はなされていない。全部を日本に運ぶからだろう。『在庫目録』は1871年10月1日現在のものだ。薩摩辞書序文に明示された旧暦「十月」は、新暦では11月13日から12月11日までの範囲になる。10月1日は印刷中だ。その作業完了が同年11月から12月までのことだとすれば、時間的に矛盾しない。

9代目長男カルヴィンの別の工夫

薩摩辞書を印刷するために種字を彫り、活字の母型から手がけていたのは、長男カルヴィンだ。実際の印刷刊行は、新暦11月から12月にかけてだろう。長男カルヴィンはその時期には上海に留まっていた。そう考えていいと思う。

ついでにいえば、薩摩辞書第3版の英文序 (1869. 1 / 明治二年正月) には、ギャンプルへの謝辞が盛り込まれている。だが、第4版の日本語序では、長男カルヴィンどころか美華書館関係者の名前は見えない。

長男カルヴィンの証言をもう少し引用する。

…… 私は、また鉛版印刷にも多くの工夫をこらし、十分な成功をおさめたのだった。あるひとりの少年を訓練し、私が退任するまでに『マタイ伝』を鉛版印刷した。その仕事を効果的にしかも迅速にすすめるために、私は加熱炉に印刷機を装着し、いくつかの変更をくわえると非常によく動いた。伝記155-156頁、漢訳99-100頁

『マタイ伝』と訳した箇所の内容は *Matthew* だ。『在庫目録』には書名の似た書籍が3種類ある。

ひとつは、ブリッジマン (Elijah Coleman Bridgeman, 1801-1861) とカルバートソン (Michael Simpson Culbertson, 1819-1862) の共訳だ。

4頁 15 馬太伝福音書

Matthew. 12mo. 64p. 1871 行 2.10 7,675 E. C. Bridgeman and M. S. Culbertson

「行」は活字の大きさを意味する（注13参照）。「2.10」は100部あたりの値段、在庫が「7,675」部あるという意味になる。

別の2冊は、次のとおり。後者は、ブーン（William Jones Boone息子, 1846-1891）の上海方言による翻訳書だ。

5頁 49 馬太伝 鉛板

Matthew. 12mo. 98p. 1871 行 2.45 5,000 Peking Committee

6頁 55 馬太伝

Matthew. 12mo. 114p. 1871 行 2.85 10,000 W. J. Boone

3種ともに印刷は、1871年となっている。同じ判型で同じ大きさの活字を使用し、ページ数がそれぞれ異なる。15番ブリッジマンらの『マタイ伝』の在庫数7,675部を見る。その半端な数字は、すでに販売されて時間が経過していることを示している。49番北京委員会本と55番ブーン本は、その区切りのよい在庫数からして、両者ともにブリッジマン本より後の印刷に思える。

49番『馬太伝』に「鉛板」と表示されている。ここに注目すれば、長男マティアーが訓練した少年、その彼が鉛版印刷したのは北京委員会本であったと考えてよいだろう*31。

長男カルヴィン伝の記述をいちいち確認しているのは、書かれた内容が事実を反映しているかどうかを知るためだ。上海県城小東門外美華書館の教会堂と責任者用住居については、事実と一致していない。だが、それ以外の事柄は、目録などを見るとほぼ伝記の記述通りだと思われる。

長男カルヴィンが説明を続ける。

マ マ
..... 私はまた新しい漢字活字ケースを作ったが、これは旧型のものくらべて改良されていると思う。さらに、母型についても完全に、また徹底的に見なおしを行ない、すべてを再配置し新しい活字ケースを作成した。これは容易ではない仕事だった。しかし、私は確信しているが、それは印刷所の能率的な作業にとってきわめて大きな助けとなるだろう。伝記156頁、漢訳100頁

改良した、とあっさり書いている。しかし、ここは重要な箇所だ。

漢字活字の母型と活字ケースといえば、ヘブバーン辞書のところで出てきた6代目ギャンブルに触れなければならない。

彼が美華書館でなした仕事で高く評価されているものがふたつある。電鋳母型*³²（蠟型電胎法とも）という方法を採用し、大小数種類の漢字活字を作ったこと。もうひとつは、漢字の使用頻度を調査したうえで、活字を選択（文選）しやすいように部首別に分類して配置したことだ。漢字調査の結果は、1861年に刊行されているという*³³。

長男カルヴィンが「旧型」だといっている活字ケースは、ギャンブルが創出したものを指すにちがいない。長男カルヴィンは、自分の行なった改良工夫に対して大きな自信をもっていることが彼のことばから伝わってくる。将来への見通しをも述べているほどだ。

ここで、ヘブバーンの指摘を思い出す。すなわち「ミッションの印刷所も、またひどく混乱していました」だ。

可能性としてその原因のひとつは、長男カルヴィンのその工夫にあったのではないか。

すでに長期間にわたって使用されてきた活字ケースが、そこにある。ところが、責任者の指示で新しいものに置き換えられた。

その時期はいつか。長男カルヴィンの在任期間からみると、ヘブバーンが辞書第2版の印刷のため上海にやってくる前らしい。

実際に活字を拾う工員から見ればどうか。10年かそれ近くの長年にわたって使い慣れた活字ケースだっただろう。それとは別のものが、目の前におかれた。いくら改良されたとはいえ、他人のやったことだ。こればかりは慣れの世界だろう。印刷所の責任者が合理性を追求して新しく工夫したとしても、実際に使用する人々にとってはめんどろなだけかも知れない。それが印刷作業に影響をおよぼす。「混乱」のひとつの表われではなからうか。推測のひとつにすぎない。

美華書館責任者の地位を短期間で他人にゆずった人たちを説明して、ヘブバーンは、「一時的にそこにただけで、印刷に特別の関心はなかったのです」と断言した。このなかに9代目長男カルヴィンが含まれている。

長男カルヴィンの印刷に対する熱意も努力も、ヘブバーンには理解されずじまいだった。あるいは、印刷について熱心に努力した結果、余計な変更と混乱をもたらした、というのがヘブバーンの認識だったかもしれない。辞書印刷の作業工程に支

障を生じさせたという怒りが「印刷に特別の関心はなかった」という否定形で表出したのではないか。

9代目長男カルヴィンの弟が10代目三男ジョンである。

三男ジョンが美華書館の責任者となるために上海に到着したのは、1871年8月3日だった*³⁴。ヘプバーンが和英辞書第2版の原稿をたずさえて上海を訪問する約3ヵ月以前になる。就任して間もない三男ジョンは、そのころ美華書館において印刷の仕事に早くなれるように努力している最中だ。さらに、漢語の学習もしなくてはならない。そこにヘプバーンが日本からやってきた。以上の時間の推移を考えると、彼は翌年にかけてヘプバーン辞書第2版を担当したはずだ。

ヘプバーンから見ると、10代目三男ジョンは、なんとも頼りない人物だった。

三男ジョンの上海到着

1870年、長男カルヴィンはしかたなく美華書館の責任者になった。伝記の作者はそう書いた。だが、長男カルヴィンは、それ以前から美華書館には注目していた。1869年11月だから、上海大会が開催される1870年よりも前のことだ。彼はアメリカにいる三男ジョンあてに手紙を書き、美華書館は、将来中国で最大かつ最高の印刷所になるだろう、と知らせている（伝記157頁、漢訳100-101頁）。

長男カルヴィンは、美華書館で働くのは1ヵ年だと約束した。後任の責任者を急いでさがさなくてはならない。彼が白羽の矢を立てた人物は、身内である三男ジョンだ。ジョンは、大学をおえたあと牧師になり宣教師として外国へ行く希望を持っていた。しかし、健康上の理由でその計画は放棄せざるをえなかった。長男カルヴィンは、三男ジョンが機械を製造する方面に才能があることを知っていた。だから、三男ジョンを美華書館の責任者として派遣してくれるようアメリカ本部に提案し、それが実現する（伝記157頁、漢訳100頁）。

三男ジョンが上海でまずしなくてはならないことは、前述のとおり、ひとつは漢語の学習だった。もうひとつは、彼がやるべき業務の内容を把握することだ。それらのことが長男カルヴィンの実質的辞任を遅らせた。つまり、三男ジョンが自立できるように、長男カルヴィンが裏で支援していたのだ。約束の1ヵ年になる1871年10月までに身を引いたのは、あくまでも表面上のことだったらしい*³⁵。

さきに紹介した美華書館の『在庫目録』だ。1871年10月1日という日付を記したこの目録には、三男ジョンが責任者の肩書きで名前を出している。ここから考え

れば、長男カルヴィンから三男ジョンへの任務引き継ぎは、公式では10月1日以前には完了している。

以上の出来事を時間順にならべてみる。

1871年8月3日、三男ジョンが上海に到着する。同年11月13日から12月11日のあいだに、長男カルヴィンが担当した薩摩辞書の印刷が完了する。1871年11月中旬、上海に到着したヘブバーンは、印刷された薩摩辞書を見ている。

1871年から1872年にかけて、上海の美華書館には、マティーア兄弟、薩摩学生、およびヘブバーンが集合していたことになる。

長男カルヴィンが登州にもどって3ヵ月が経過したとき、ふたたび上海に出向かねばならなかった。三男ジョンを手伝って印刷所を、購入した新しくてもっと良好な場所（家屋）に移転させるためだ。これは大変な作業で、困難で汚れた労働が1週間も必要だった、と書いている。

上海県城の小東門外から動いた先のその場所とは、どこか。北京路だという。

新しい場所までは約1マイル（樽本注：約1.6km。以下同じ）あったが、ほとんどは水路で、陸の両端（川岸から建物まで）は100ヤードと少し（約91m）だけだった。彼（長男カルヴィン）は公式にはすでに印刷所の責任者ではなくなっていた。しかし、彼の弟が言語の習得とおぼえなければならないその他のことに時間を割くことができるように、移転の主要な責務を担ったのだ。/その新しい場所とは、現在も印刷所がある北京路である。157頁、漢訳100頁

距離はおおよその数値を示していると考える。上の場所についての記述は、北京路清遠里口にあてはまる（後述）。

1871年10月以前に長男カルヴィンは美華書館を辞任した。登州に帰って3ヵ月後だから、翌1872年になったかならないころだろう。長男カルヴィンは、わざわざ上海におもむいて美華書館が北京路に移動するのを指導した。

北京路へ移ったことについて、伝記のなかでは一連のできごととして説明している。読んだかぎりでは、それほど不自然ではない。長男カルヴィンは、責任者ではなくなっているのにもかかわらず、言語と仕事に不慣れな三男ジョンをおもい彼を支援するために、自分からすすんで困難な仕事を担当した。ある種の美談仕立てである。

美華書館が北京路に移転したのは事実だ。しかしその時期について、この伝記の記述についておのずと疑問がでてくる。

手順として、まず美華書館の位置を再度確認する。再度というのは、すでに解決している問題だからだ。そののち長男カルヴィンの伝記にもどる。

北京路の美華書館

英租界北京路に移動したまでは、いい。その先が問題だ。北京路のどこか。

私は商務印書館があった場所を特定するために、美華書館の所在をふるい上海地図で示したことがある。

東西にのびる北京路と、蘇州河の岸辺から南にさがる清遠里^{*36}が交差する箇所に、美華書館の名前がある。『重修上海県城廂租界地理全図』(1893)からの引用だった。

今回、ふたつの地図を掲げる。

ひとつは、張偉等編著『老上海地図』(上海錦繡文章出版社(上海画報出版社)2001.6/2007.8第3次印刷)所収の『新繪上海城廂租界全図』(1898)だ。部分拡大しておく(地図1)。もともと鮮明ではないので、せいぜいがこれくらいにしかならない。乍浦路に架かる二擺渡橋の記載がある。作成されたのは、比較的新しい。

別のひとつは、遠山景直、大谷藤治郎編『蘇浙小観』(江漢書屋1903.6.9)の附録地図だ。こちらにも北京路清遠里口に美華書館の名前がある。まず、美華書館を明記した地図はめずらしい。さらに、日本で刊行された書籍だ。日本人読者の興味を引いたものかとも思う(地図2)。二擺渡橋の記載がない。もとづいたのは1893年版『重修上海県城廂租界地理全図』あたりかと推測する。

その時の私の興味は、商務印書館が移動した先の住所にあった。北京路慶順里でしかも美華書館の西側だというだけで十分だ。美華書館の位置については、それ以上探索する必要を感じなかった。その後、関連論文は読んだが、北京路清遠里口の地図がすでに解答を示していると思っただけ。

このたび、マティーア兄弟と美華書館の問題を調べるにあたり、関係する文章を読みなおし、新しい論文は入手した。それらに美華書館の位置を地図にもとづいて追求している部分がある(論文名は注参照)。

私なりに要約しよう。美華書館の移転先は、英租界北京路18号(あるいは15号)である。その地番を手がかりにして、1866年の上海地図で該当の場所を特定した。



地圖1：上海1898（部分）美華書館



地圖2：上海1903（部分）美華書館

円明園路あたりだ。ところが、そののち北京路清遠里口に美華書館と明記した地図『重修上海京城廂租界地理全図』が存在していることに気づいた。増補版『新重修上海京城廂租界地理全図』(1895)にも同じ表示が見える。以前に特定したと考えていた場所よりも西にある、というようなことだ。

なんどでもいうが、英租界北京路清遠里口は、基本にあって動かない。地図でその場所を示した。すでに問題は解決している。

では今取り上げるのは、なぜか。北京路18号*³⁷のほうに問題がある。しいて疑問文にすれば、北京路18号は、北京路清遠里口とはどういう関係にあるのか、となる。もうすこし説明しよう。

資料としての案内書

美華書館の住所として表示されるもうひとつの北京路18号について、その地理的位置を別のやりかたで検証する。

私が使用する文献は『上海指南』という案内書だ。1909年再版と1916年第9版の2冊を見ている。

案内書が、上海市内にある建築物の変遷を忠実に、また適切に反映しているかどうかは断言できない。項目によっては採録が不十分な箇所もあるだろう。時間的にみて食い違うことも想像される。だが、主として建築物をあつかうとき、その時々で存在していた事実を確認することはできる。

『上海指南』から関係のありそうな場所を抽出する。

また、合致する範囲でカッコの中に『list.』と示す。これは、*THE DESK HONG LIST; A GENERAL AND BUSINESS DIRECTORY FOR SHANGHAI AND THE NORTHERN AND RIVER PORTS, 1904*, (SHANGHAI: The Office of the "North-China Herald." 1904 / 電字版) に掲載されていることを意味する。その内容は、上海の会社、あるいは組織の目録1904年版だ。組織の英文表示をabc順にならべる。それに添えられた漢字表記が参考になる。『上海指南』と照合し参考になりそうな記述は、それを示した。そちらに収録された人名は省略する。また、漢字での地番表示はアラビア数字を使用した。

『上海指南』商務印書館 宣統元年(1909)五月初版/七月再版

巻4 公益団体、17丁裏 教会

猶太教真主堂 Synagogue “ Beth El. ” 教士 D. M. David 在英租界北京路16号
(list. 19頁。16, Peking Road.)

美華書館 American Presbyterian Mission Press 教士 Rev. Geo. F. Fitch 在英租界
北京路18号 (list. 2,54頁。18, Peking Road.)

中国基督勉勵会 United Society of Christian Endeavour 教士 Rev. G. F. Fitch 在
英租界北京路18号(list. 58頁。18, Peking Road. United Society of Christian Endeavour
for China)

中国聖教書会 The Chinese Tract Society 教士 Dr. J. M. W. Farnham 在美租界靶
子路61号 (list. 17頁。中国聖教書会。The Chinese Tract Society / 61, Range Road.
/ Book and Tract Depository at the Mission Press, 18, Peking Road. list. 55頁。聖教
書会。Depository - 18, Peking road.)

卷4、18丁表

清心堂 American Presbyterian Mission 教士 Ro. J. A. Silsby 在大南門外 (list. 55
頁。大南門外清心堂 South Gate)

長老会 Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church, U.S.A. 教士 Rev. J.
M. W. Farnham 美租界海寧路1758号 (list. 54頁。Range Avenue 61)

卷4、11丁表 学堂

清心書院 在小南門外

清心女学校 在小南門外

卷5 工商業、9丁表 書坊

美華書館 洋書 在北京路18号

案内書ならば、日本でも多く出版されている。

その中の1冊、たとえば、遠山景直『上海』（国文社1907.2.28）は、『上海指南』よりも以前の刊行だ。

「教会堂」の項目で、つぎの3件を見ることができる。

「長老会 Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church, U.S.A. 靶子路にあり」(210頁)「美華書館 American Presbyterian Mission Press、北京路18号にあり」(210頁)「猶太教真主堂は北京路16号にあり」(211頁)などだ。これらは『上海指南』と重複する。また、くらべれば収録項目はそれほど多くない。

『上海指南』1909年版は、もとの名称を英語で併記している部分もある。それ

が役立つ。また、当時の責任者らしい名前も記入されている。美華書館のフィッチ、長老会のファナムらも実在する。ただし、変化する人事をどこまで忠実に表示しているかはわからない。

美華書館は、教会と書店の2カ所にでている。教会、印刷所および書店を兼ねているからだ。

清心書院、清心女学校はアメリカ長老派教会が経営する学校である。本稿とは直接の関係はない。しかし、長老派教会との結びつきがある。参考までにかかげた。

上に見る美華書館の所在は、すべて英租界北京路18号となっているのがわかる。また、中国基督勉勵合会の住所は、美華書館とおなじ北京路18号だ。これは該書1916年版でも変わらない。

美華書館とは一見関係がなさそうなユダヤ教会堂、すなわち猶太教真主堂を抜き出したのには理由がある。

美華書館の住所が英租界北京路18号だから、北京路16号の猶太教真主堂は、その近くにあるだろう。「北京路16号はユダヤ教会堂だ。18号は美華書館でそこでは毎年中国人のために多量の印刷物を印刷している」とならべて説明する欧米人むけのガイドブックもある*³⁸。北京路16号と18号は、数字から推測すると、おたがい近くに位置するだろう。

美華書館が北京路清遠里口に存在していることは間違いない。問題は北京路18号である、とふたたびいう。

後版の『上海指南』1916年版を見る。こちらからもアメリカ長老派教会に関係する組織を書き出した。

すこしの変化があるだけ。旧版と基本的にはほぼおなじとっていい。美華書館は、やはり北京路18号である。ユダヤ教会堂も変わらない。ただ、美華書館が印刷所を別の場所（北四川路横浜橋北）に設置しているのが新しい。

『上海指南』商務印書館1916第9版

巻7 雑録 甲宗教 三耶穌教 1丁裏

猶太教真主堂 北京路16号

思婁堂 北京路清遠里口

清心堂 大南門外

2丁表

中国聖教書会 北京路清遠里東
中国基督勉勵合会 北京路18号
長老会 海寧路1758号
卷6 実業 丁各業店鋪 二〇書房 12丁表
美華書館 北京路18号
協和書局 北京路18号
乙工業 二九印刷 5丁表
美華書館印刷所 北四川路横浜橋北
卷3 公共事業 甲学校 4丁裏
長老会中西学校 北京路18号

書店の部に美華書館はおなじ北京路18号に存在している。ただし、宗教の部ではその記載がなくなった。そのかわりに「思婁堂 北京路清遠里口」が新しく掲載されている（後述）。

中国聖教書会の場所は、北京路清遠里東だ。『list.』17頁の記述を見ると場所はふたつにわかれている。北京路18号には倉庫が置かれた。

思婁堂、あるいは中国聖教書会は、北京路清遠里口または東にある。それと北京路18号の美華書館が、どういう関係にあるのか。所在表記が違う。両者は別々の場所にある、と考えてもおかしくない。疑問もわからないだろう。だが、問題を解決する手がかりのひとつは、まさにこの部分にあるのだ。

ユダヤ教会堂の存在

猶太教真主堂は、英租界北京路16号で変化がない。ここに注目する。

北京路16号のユダヤ教会堂（Synagogue）を地図上に示すことができれば、近くにある美華書館北京路18号の位置は、自動的に特定される。そう考えた。これが今回の私の工夫だ。

1940年代の上海地図には、そのまま掲載されている（と思いこんだ）。1940年代の地図とは、『老上海百業指南 道路機構廠商住宅分布図』（1947 / 復刻 上海社会科学院出版社2004.5）である。

東に英国総領事署を見て西の方向に2筋目が、南北にはしる虎丘路（博物院路）



猶太教堂 Beth Ahron Synagogue

地図3：上海1947(部分)

虎丘路(博物館路)

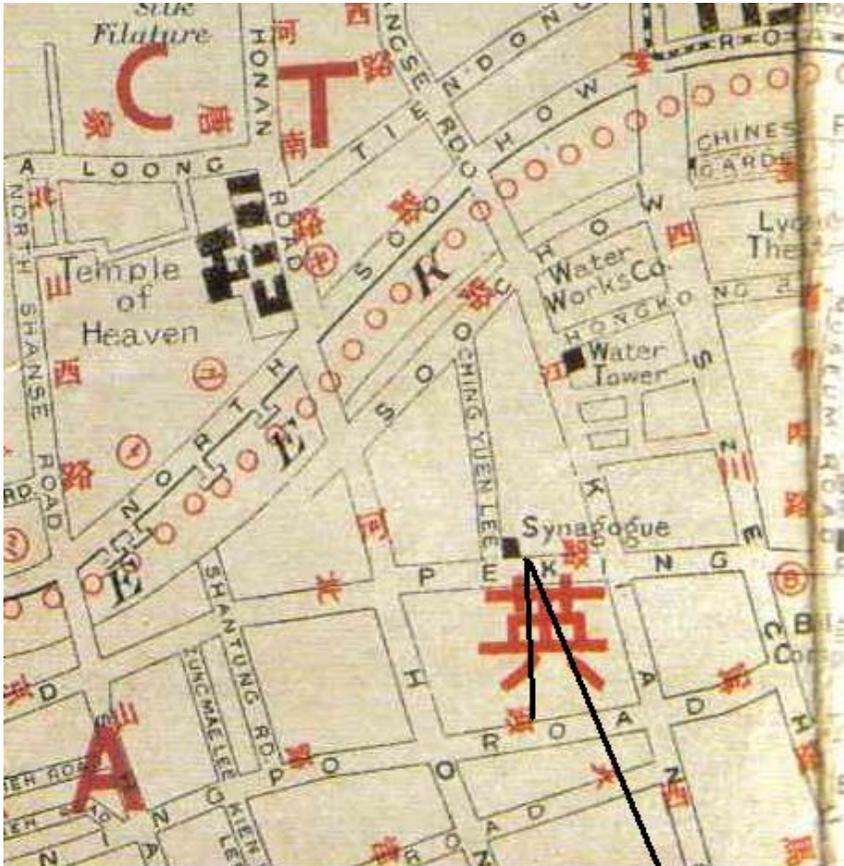
だ。ここに大きく猶太教堂がある。該地図から部分引用する(地図3)。1980年代に取り壊され今は存在しないそのユダヤ教会堂は、写真のなかに堂々とそびえている*39。

このユダヤ教会堂が、誤解のもとだった。はじめはぼんやりと、ユダヤ教会堂とだけ考えていた。今からおもえば、細かく区別しなかったのが誤りの原因である。

『上海指南』に掲載される猶太教真主堂が、上海地図1947年版の巨大なそれ(猶太教堂)だと思った。猶太教真主堂の住所是北京路16号だ。すると美華書館は、このユダヤ教会堂の近くにあったことになる。しかしそれでは、美華書館が存在する西の清遠里からみて、東方へ遠く離れてしまう。つじつまがあわない。

あらためて調べると、次のことがわかった。

猶太教堂は、当時上海にあったユダヤ教会堂のひとつだ。その英語表示は「Beth Ahron Synagogue ベスエアロン・シナゴーク」*40である。建設されたのは1927年だという。これが『老上海百業指南』に見えるユダヤ教会堂 猶太教堂だ。『上海指南』にある猶太教真主堂とは別物である。1927年に建設されるユダヤ教会堂が、それ以前の1909年版、1916年版の案内書に掲載されることはない。教会堂の名称自体が異なっているのではないか。違う建物を出発点においては、問題



地図4：上海1910（部分）Synagogue

は解決できない。

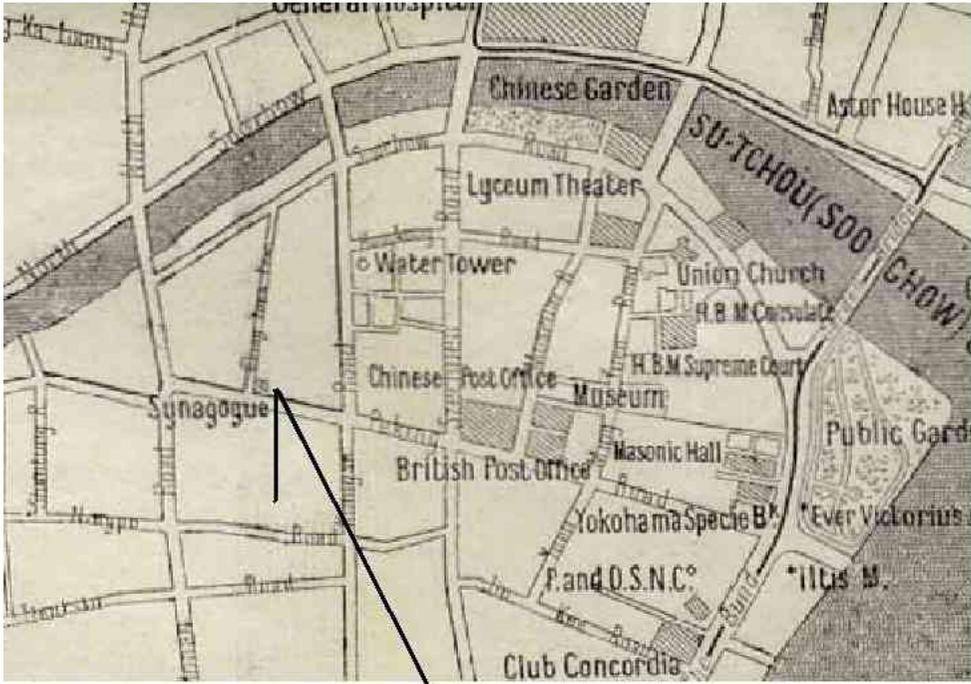
『上海指南』の猶太教真主堂にそえられた英語表示は、「Beth El.ベス・エル」だ。北京路16号に位置しているのは、このベス・エル・シナゴグなのである。1887年に建設された上海最初のユダヤ教会堂だった*41。

ここから、もう一度出発する。ベス・エル・シナゴグを掲載する上海地図を探す。これこそが今回の問題を解決する方法だ。

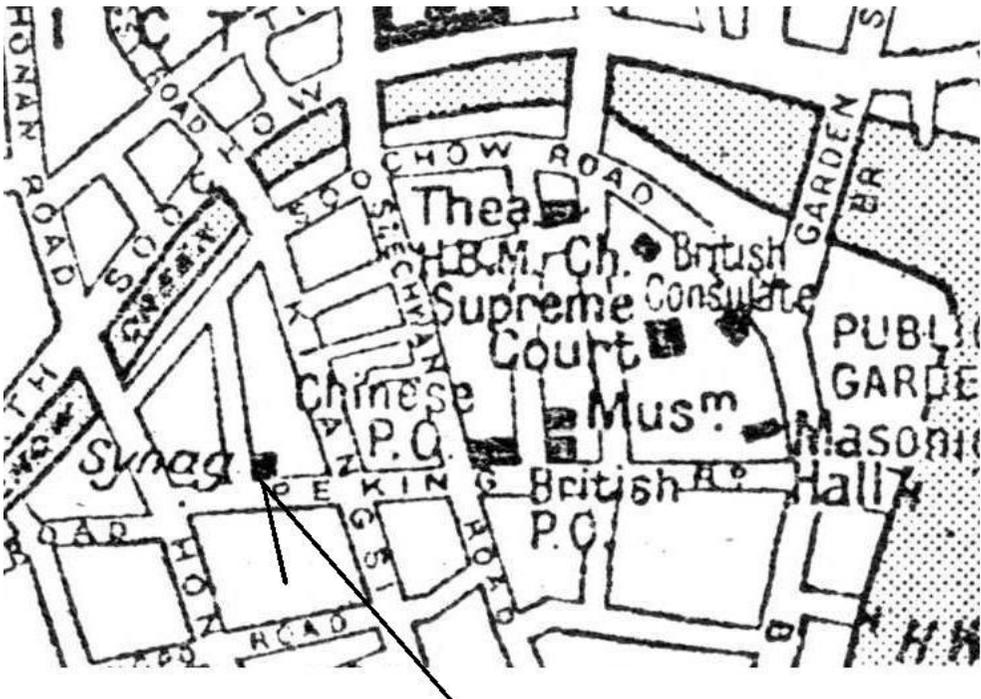
前出『老上海地図』に1910年版の1枚が収録されている。日本人が作成した。漢字をまじえながら表示の基本は英語だ。北京路（PEKING ROAD）と清遠里（CHING YUEN LEE）が交差する箇所にユダヤ教会堂がある（地図4）。

また、ウェブ上で地図コレクションを見つけた。テキサス大学が所蔵し公開している。該当する上海地図が2件ある。それらから部分的に引用する。

地図5：上海1912（部分）Synagogue



地図6：上海1932（部分）Synag



上海地図の1912年版（地図5）と1932年版（地図6）に Synagogue あるいは Synag と記されているのをご覧いただきたい。ベス・エル・シナゴグ（猶太教真主堂）に違いない。まさに美華書館のある位置に重なっているように見える。もとは隣接していただろう。

猶太教真主堂の存在する場所が、同時に美華書館の位置をも指し示している。これは有力な証拠である。

いくつかの地図に表示される美華書館とユダヤ教会堂を確認することができた。これで検証は終了している。

それをあえて、場所を特定するためには、ほかになにがあるのかを考える。

ラウリー記念教会堂

ひとつは、前出の中国聖教書会である。住所表示は北京路清遠里東だ。『list.』によると、その書籍部は北京路18号なのだ。北京路清遠里の東とはいえ、北京路18号と場所は同じように思える。

もうひとつある。興味深いのは、ラウリー記念教会堂の存在だ。

宮坂「美華書館史考」は、英文雑誌に掲載された記事を紹介している。すなわち、1895年にラウリー記念教会堂 Lowrie Memorial Chapel（またはChurch）が美華書館の敷地内に建設されその正式公開が行なわれた、と（184-185頁）。

該論文に掲載されたラウリー記念教会堂の写真をながめる。

右手前には、門がある。弓形の上部看板に「書館 / OFFICES & SALES ROOM / 美華 / / PRESBYTERIAN MISSION PRESS」と示している。奥は美華書館の3階建ての建物だ。門の左側にラウリー記念教会堂がたっている。かなり大きく見えるのは、写真だからだろう。十字架をかかげた尖塔*42をいただいでいかにも教会堂の形をしている。

なにが重要かといえば、こうだ。

美華書館の前庭、つまりもとからあった南側の広場に、ラウリー記念教会堂があとから建設された。同じ敷地だから地番もたぶん同じ北京路18号だろう。その隣には、ユダヤ教会堂がすでに建っていた。

宮坂論文に引用されたその記事原文を読む。「北京路 Peking Road」に所在している「その教会堂は、美華書館に隣接して……」と説明がある*43。このラウリー記念教会堂は、美華書館の歴史と切り離せないものなのだ*44。

ほかにも、ラウリー記念教会堂の住所を、英語表示で地番なしの「Peking Road」とするものは、普通にある*45。

アメリカ長老会派教会のウォルター・ラウリー（Walter Lowrie, 1784-1868）の子供たちは、六男二女だ。その中に宣教師になった3人の息子たちがいた。長男ジョン（John Cameron Lowrie, 1808-1900）、三男ウォルター（Walter Macon Lowrie, 1819-1847）、五男ルーベン（Reuben Post Lowrie, 1827-1860）である。

では、記念教会堂に名づけられたラウリーとは誰か。可能性があるのはふたりだ。中国で若くしてなくなったのは、ウォルターとルーベンである。この教会堂は、そのうちの五男ルーベンを記念したものだ。

私がそう判断する理由は次のとおり。

三男ウォルターは、主として寧波で活動していた。海賊の犠牲となった彼の墓は、寧波に置かれた。三男を記念するならば、寧波に教会堂をたてるだろう。

一方、五男ルーベンについていうと、1854年から1859年まで、上海がその活動拠点だった。病氣療養に日本横浜で短期間をすごしたあと、1860年に上海にもどり死亡した。

ヘプバーン書簡に彼ルーベンの名前が見える。関係部分をまとめて示す。

「1860年2月6日 もしルーベンがわたしどもに加わってくださるなら、非常に嬉しいのですが。上海が彼にとって適した場所でないことが分かり、国に帰る代わりに、彼がこちらに来るように、わたしは望んでおります。このことを彼に提案いたしました」（全集36頁）「1860年5月14日 ルーベン君はどうもよくないとききました。ここへ訪ねてきたことがよくなかったのです。その後、少しずつ病勢が重くなっているようで、カルバートソンの考えでは中国から帰るまでもたないとの予想です。あなたもお聞きのことと思いますが、このような事情はわたしも疑いません」（42頁、全集50頁）「1860年6月5日 ルーベン氏の死をきいて哀悼の意を表します。多分中国から帰ることに成功しても、病氣は急によくはならなかったでしょう。病氣を癒すことができなかったためです。彼の仕事はおわり、天国の休みに入ったのです。彼の死は上海のミッション同僚の間で非常に痛嘆されていることと存じます」（49-50頁、全集55頁）

ルーベンは、生前、上海蘇州河沿いのどこかに単独の教会堂を建設したいという願いをいだき、1,916ドルの寄付をすでに集めていた。ニューヨークにいる父ラウリーは、それに1,500ドルを加えた。総額3,416ドルの基金である。

もとをたどれば、上海に（ルーベン）ラウリー記念教会堂ができたのはそういう経緯だった。以上のファーナムによる貴重な証言*46は、事情を説明して詳しい。時間を考えると、ルーベンが上海で死去したとき、ファーナムは彼を看取ったと推測できる。

ファーナムの説明に従うならば、既出の「ラウリー記念教会堂 the Lowrie Memorial Chapel」と題したその報告記事が奇妙だ。なぜだか三男ウォルターを記念したとする。「今は亡きウォルター・ラウリー師」(97頁。父ラウリーではない)と書く。その名前を Walter Macon Lowrie と明示し、三男ウォルターの経歴を紹介する。どこからどう結びついたのか。単なる勘違いだろうか。

誤解といえば、美華書館史を書いたマッキントッシュも同様だ。前出「六十年史」に掲げられた記念教会堂の写真に添えて WALTER LOWRIE MEMORIAL CHURCH と説明する(36頁)。文脈から見ても、三男ウォルターを記念した、とマッキントッシュも信じているらしい。

記念教会堂といいながら、その主体が別人だとはどういうわけなのだろう。兄弟だとはいえ、違う人物を指摘する理由がわからない。五男ルーベンが亡くなって記念教会堂が落成するまで、すでに35年が経過している。当時の事情を知るのは、ファーナム以外には誰もいなかったというのだろうか。

『上海指南』1916年版に記述されている「思婁堂 北京路清遠里口」をもういちど見てほしい。その住所表示は、地図にある美華書館と同じではないか。

漢字で表記された「思婁堂」がなにかといえば、ラウリー記念教会堂そのものなのだ。「婁」とは、ラウリーを表わす漢字である。

「婁」一字で表示する著書*47がある。また、婁理瑞*48とする。あるいは、婁理仁*49というのも見える。

ラウリーをいただいた教会堂が、美華書館の敷地内に建てられた。北京路清遠里口という住所表示を共有するのは、当然のことだ。事実、「北京路18号」を記念教会堂の住所表示とするファーナムの文章がある(another Mission Press chapel at 18 Peking Road.*50)。

美華書館内に設けてあった教会堂(礼拝所)は、独立した隣のラウリー記念教会堂に移動した。これが、『上海指南』1916年版宗教の部において、美華書館が消失し思婁堂が出現した理由かもしれない。ただし、思婁堂が1895年に完成したにもかかわらず、なぜのちの1916年版『上海指南』に掲載されたのか。疑問はある

が、今は問わない。

以上をふまえての結論はこうだ。北京路清遠里口と北京路18号は、同じ場所を示すふたつの表記だと考えるのがよい。

では、なぜふたつの表記があるのか。これを考えるのはそれほど困難ではない。上海に住む外国人のために便宜をはかったのであろう。欧米人にとっては、清遠里をローマ字綴りで「CHING YUEN LEE」と書くよりも「18, Peking Road.」としたほうが簡単で理解しやすい。

宮坂論文によると、美華書館の責任者だった（11、14代目）ホルトが「15 Peking Road」と記した便箋を使っていたという（184-185頁）。これについては、私にこれとって良い考えはない。

伝記と美華書館の移転

『C・W・マティーア伝』にもどる。

伝記が説明している北京路への移転について、時間上の疑問がでてくる。ほぼ事実を反映していると思われた伝記だが、その時期があわない。伝記の記述にしたがえば、1872年ころになるのだ。これは、現在判明している1875年とは違う。

宮坂「美華書館史考」が資料にもとづき美華書館の移動に関して説明している。私はその資料原文を未見のため、事実だけを書き出して孫引きする。

1872年春、新しい建物のために4,020ドルで土地を購入。1875年6月1日、Chinese Polytechnic Society に6,122.42ドルで売却。同年6月、小東門の不動産を20,260.55ドルで売却。同じ頃、英租界の地所を18,039.96ドルで購入。9月英租界に移転。180-181頁

結論だけを抽出した。1872年から1875年までの間に土地の売買をくり返している。小東門外から英租界北京路へ到着するまでに曲折があったことがわかる。

それにしても、細かい数字があげられているものだ。アメリカ本部に会計報告をする必要があるのだろう。

単純に計算してみる。小東門外の不動産購入費用は含まない。

以前、別の場所に購入してあった土地を Chinese Polytechnic Society つまり、のちの上海格致書院^{*51}に転売して2,102.42ドルの利益を得ている。小東門外の不動産

を売却して英租界の土地を購入したときも2,220.59ドルの黒字だ。合計して、4,323.01ドルの純利益を得た。くりかえすが、1872年から1875年にかけてのこと。不動産売買のみによる収益である。そのとき美華書館責任者の地位にあったのは、10代目三男ジョンだ。

土地を購入転売して利益を上げるなどは、並みの才覚では行なうことは無理だろう。単純にそう思う。それとも、外国に住むアメリカ人宣教師は、いわゆる雑事にも精通していたのだろうか。いや、無理矢理対応するしかなかったか。アメリカ人宣教師が、日本あるいは中国で宣教するためには、自分たちの住居を確保することも必要事項のひとつにちがいない。

なるほど、ヘプバーンのアメリカ本部にあてた手紙のなかに、土地の購入と家屋の建築について金銭がどうの、というものを見かけるはずだ。1例を示す。

1862年4月2日 山手に家を建てることにわたしはとても気が進みませんので、請求される高い価格を払ってでも横浜に土地を買い、そこに家を建てる結論を出しました。……(中略)……すなわち、横浜の地所は少なくとも買った値段で、家屋と土地ならより高価に、いつでも売ることが可能でしょうが、山手については何事も不確かです。実際そこにわたしどもが土地を得られるかでさえ確かではありません。あらゆる種類の貿易を麻痺させている合衆国と英国との間の戦いの暗雲に起因して、何事も不確かなこの時期に、そのようなわけで横浜に土地を買う決断をしました。ひそかに出かけ、配置図を手に入れ、町中で最も良い区画を手に入れました。二五〇〇ドルで買いました。一〇日後であったならば、その値段で手に入れることはできなかったでしょう。全集117頁

アメリカ本部との連絡には日数がかかる。ヘプバーンが日本で土地を購入するにあたって、時期を逃すとかえって割高になるという例だ。こういうばあい、現地での判断が先行したとわかる。アメリカ本部は事後承諾ということになる。

美華書館が北京路清遠里口、つまり北京路18号に移転したのは1875年9月が正しいのだろう。そうすると伝記で読みとった1872年という時期は、長男カルヴィン、あるいは伝記作家の勘違いだ。

ただし、それによって彼が印刷所の移動を主導したことは事実ではない、と判断

してはならない。三男ジョンが美華書館を退職したのは、1876年5月だという*52。印刷所が移転したのは、10代目三男ジョンの任期中であるのはたしかだ。そのために元9代目責任者だった長男カルヴィンが、登州から上海に出てくることもあっただろう。

ヘプバーンとマティーア兄弟

マティーア兄弟について、マッキントッシュはつぎのように書いている。

Ｊ・バトラー師が、臨時に彼（樽本注：Ｊ・ウェリー）のあとをついだ。そののち、Ｃ・Ｗ・マティーア師によって1871年の夏まで引き継がれた。つまり、Ｊ・Ｌ・マティーア氏がアメリカからやってきて管理責任を負うまでのことだった。英文24頁、漢訳15頁

ここは、責任者の交替を紹介している。ヘプバーンのいう「四人のちがった主任者」だ。つづいて、マッキントッシュは、マティーア兄弟についてつぎのように説明する。

さいわいなことに、現実的で活気に満ちた、立派な家庭の出身であるこのふたり（樽本注：マティーア兄弟）は、その歴史のなかで決定的な時期にあったとき、美華書館に深くかかわっていた。ふたたび建物が、働くのにはあまりにも狭くなりすぎると*53、兄弟は大規模な計画を立てることができたし、またそう決定したのだが、古い建物を売却し、現在美華書館がある場所を購入し、1875年に所有権を手に入れた。同上

美華書館の「決定的な時期」とは、上海県城小東門外から英租界北京路への移動時期を指している。印刷所が、設備を充実させ大きく発展する転換点という意味だ。マティーア兄弟に対するマッキントッシュの評価は、たかい。兄弟の将来を見通す構想力、土地の売買で見せた判断力、またそれらを実現させた実行力について十分な理解を示している。

1869年から1872年までの美華書館責任者は、たしかに4名が入れ替わりで就任した。「今もその印刷所にいる一人」というのは、10代目三男ジョンのことを指

している。その人は「傲慢で、でくのぼうです。有用どころか邪魔になる人です」とまでヘブバーンに書かれた。その「でくのぼう」が、土地の売買にあたっては印刷所に有利になるように行動し、北京路への移転を実現させた。しかも、1871年から1875年（または1876年）まで4、5年間も責任者の任務についている。日本との関係でいえば、その任期中に、アメリカ人宣教師、あるいは日本人が編纂したいくつかの辞書を確実に印刷刊行しているのだ*54。マティーア兄弟に関するヘブバーンとマッキントッシュの意見は、対立しているといわざるをえない。

マティーア兄弟とは面識のあったヘブバーンだ。彼が兄弟に対していただいた印象は、あまりよいものではなかった。一方のマッキントッシュは、その時その場に居合わせてはいない。美華書館の歴史をふりかえり、兄弟がはたした役割を客観的に考えたいのでの説明だ。そこがふたりの意見がわかる理由だろう。 罫

【注】

- 1) 参照：宮坂弥代生「近代日本における宣教師と印刷 キリスト教宣教師の手紙から」『日本の近代活字 本木昌造とその周辺』近代印刷活字文化保存会2003.11.7
- 2) 明治学院大学図書館『和英語林集成』デジタルアーカイブス
- 3) 全集本で新しく公開された。なお、該書は『ヘボン書簡集』とは日時の表記法を変えている。いずれにしても新暦を使用しているから、本稿ではアラビア数字で表記する。樽本「アメリカ人宣教師の暦」『清末小説から』第106号所収。また、雑誌の巻号数も同じくアラビア数字を使用する。
- 4) 美華書館の地理的位置については、宮坂氏が小宮山博史論文などを整理しなおした次の論文が詳しい。宮坂弥代生「東洋におけるプロテスタント伝道と印刷 美華書館（アメリカ長老会印刷所）を中心に」愛知大学現代中国学会編『中国21』Vol.28 風媒社2007.12.25。同氏「美華書館史考 開設と閉鎖・名称・所在地について」『活字印刷の文化史 きりしたん版・古活字版から新常用漢字表まで』勉誠出版2009.5.15
- 5) ギャンブルと美華書館については、次の論文が詳しい。馮錦栄「姜別利（William Gamble, 1830-1886）与上海美華書館」復旦大学歴史系、出版博物館編『歴史上的中国出版与東亜文化交流』上海文藝出版（集团）有限公司、上海百家出版社2009.11 / 2010.3第2次印刷。また、その簡略版がある。同氏「姜別利与上海美華書館」上下、出版博物館主編『出版博物館』2010年第3期（総第11期）2010.9、2010年第4期（総第12期）2010.12
- 6) 杉山栄『先駆者岸田吟香』岸田吟香顕彰刊行会1952.4.5。76-77頁
- 7) すこし時間をさかのぼる。ブラウン自身が書簡で述べている。以下は、高谷道男編訳

『S.R.ブラウン書簡集』（日本基督教団出版局1965.11.1 / 1980.6.20）による。

ブラウン1861年8月16日 上海の印刷所に渡す原稿の準備で、毎日、仕事におわれています。まだ書名はきまっていません。前の船便で四〇ページのフルスキャップ版を送り、次の便で、また四〇ページを送る用意をしています。この著作は上海の米国長老ミッションの印刷所で印刷することになっています。残念ながら、こちらで校正ずりを訂正することができませんので誤植や誤謬などを正して出すことができません。しかし、わたしはどうしてもこの仕事を思いきってやってみようと思います。75頁

たしかにヘプバーンの和英辞書よりも時間的に先行している。「米国長老ミッションの印刷所」は、前述のとおり美華書館のことを指す。フルスキャップ foolscap は判型のこと。以上から読みとれるのは、原稿の一部分を試し刷りのために上海の美華書館に送っていることだ。

日本に派遣された宣教師をもうひとり紹介する。フルベッキ（Guido Hermann Fridolin Verbeek のちに改名して Verbeck, 1830-1898）である（参照：村瀬寿子「フルベッキの背景 オランダ、アメリカの調査を中心に」『桃山学院大学キリスト教論集』第39号 2003.3.1）。フルベッキは、主として長崎において活動していた。その書簡集に美華書館についての言及がある。すなわち、1861年9月30日付で、「同氏（ブラウン）の新しい『日英会話編^{ママ}』が、一部上海で印刷されました」（高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』新教出版社1978.7.1。56頁）とある。これが試し刷りの一部分であろう。

さて、ブラウンは、翌年、みずからも上海に渡って印刷状況を確認している。

ブラウン1862年2月18日 なおこのほか、日本語の研究を始める人々の手引きになると思い編集した『日英会話篇』のおもな部分を、上海の印刷所に送りました。上海の長老ミッションのガンブル氏が印刷しています。もっとも、日本字の活字は、そろっていないので仕事がおくれています。印刷の仕事始める目的で、一〇月上海に行き、印刷の監督として、ほぼ三週間すごしました。87-88頁

『日英会話篇』の発行は、1863年というだけで月日は不明だ。ブラウンが印刷のために上海に行ったのが1862年10月だった。その後、江戸幕府の了解のもとに通訳者養成学校で彼らが教えた際に使ったのが『日英会話篇』だという。1863年8月25日付書簡に見える(140頁)。以上から、該書は少なくとも1863年8月以前には印刷刊行されたことがわ

かる。

そのブラウン『日英会話篇』だが、上海での印刷とフルベッキが関係しているようにも考えられる。それは、こうだ。1862年、日本で生麦事件が発生した。大名行列に馬で入り込んだイギリス人が薩摩藩士によって殺傷された事件である。最初、江戸から遠くはなれた長崎では、外国人は安全だと思われていた。ところが、江戸幕府とイギリス政府の賠償交渉が紛糾するにつれて不安が広がり、開戦への恐れを感じた外国人が増えてくる。そのなかのひとり宣教師フルベッキは、妻子とともに長崎から上海へ避難した。1863年5月のことだった。フルベッキは、美華書館のガンブルと日本語活字について相談している。

フルベッキ1863年5月22日 なおこの外に長老ミッションの印刷局長のガンブル氏が日本字の活字の一そろいを用意しています。ガンブル氏はこのためにわたしに助力をもとめているので、わたしも同氏に助力をおしみません。77頁

フルベッキ1863年6月20日 ちょうどいま、ガンブル氏と一緒に日本文字のかなの活字を用意しております。この活字は長老ミッションの印刷所（美華書館）が所蔵しているので、将来わたしたちにとって、大いに役に立つことでしょう。80頁

当時も美華書館の責任者はガンブルだった。フルベッキが言及する美華書館に所蔵される日本のカナ活字とは、時期的に見てブラウン『日英会話篇』に使用したものと考えられる。

- 8) 山口豊『岸田吟香『吳淞日記』影印と翻刻』武蔵野書院2010.5.15による。句読点を加えた。
- 9) 陳祖恩著、大里浩秋監訳「第5章文人商人・岸田吟香」（『上海に生きた日本人 幕末から敗戦まで』大修館書店2010.7.10。71頁）には、次のような箇所がある。「上海でヘボン夫妻が病に倒れたため、和英辞書の校正作業の大部分は岸田が担当することになった。彼の月給はわずか一〇円で、半分が食費に消えたが、その残りで好きな書画を購入した」。原文は、陳祖恩「文化商人岸田吟香」『尋訪東洋人 近代上海的日本居留民』上海社会科学出版社2007.1。60頁
- 10) 小宮山博史「一九世紀ヨーロッパ・中国での明朝体金属活字の開発と日本への伝播」西野嘉章編『歴史の文字 記載・活字・活版』東京大学出版会1996.10.1
- 11) 吉田寅「入華宣教師マッカーティーと中国語布教書」『立正大学文学部論叢』第94号1991.9.20 / 電字版。5-32頁。同氏『中国プロテスタント伝道史研究』汲古書院1997.1.20。中国社会科学院近代史研究所翻訳室『近代来華外国人名辞典』北京・中国社会科学出版

社1981.12。298頁

- 12) *CATALOGUE OF BOOKS IN THE DEPOSITORY OF THE AMERICAN PRESBYTERIAN MISSION PRESS AT SHANGHAI, OCTOBER 1, 1871*, SHANGHAI: American Presbyterian Mission Press, 1871 / 電字版
- 13) 「明」は、該目録凡例にある4種類の活字のうちでいちばん大きい。参考までにそれ以外の3種類を大きい順に書いておく。中 Double Brevier > 行 Three-line Diamond > 解 Small pica。該当部分の写真を掲げておいた。
- 14) 参照：吉田寅「中国語キリスト教書と訳版の比較的考察　ヘボン刊『真理易知』和訳版の一考察」『比較文化』創刊号　文化書房博文社1995.9.2
- 15) 高谷道男編訳『ヘボンの手紙』有隣堂（新書）1976.10.10。この『ヘボンの手紙』は、全集に未収録。105頁。ヘブバーンが横浜にいるころ、1871年8月21日付弟あての手紙には、「十一月一日ごろ、辞典の第二版のため上海に渡航する予定です。少なくとも六ヶ月をその地に滞在しなければならぬでしょう」（105頁）と書いている。予定と実際の出発は、違ったらしい。
- 16) D. MacGillivray (Ed.), *A CENTURY OF PROTESTANT MISSION IN CHINA(1807-1907)*, SHANGHAI: American Presbyterian Mission Press, 1907. 636頁
- 17) 中井えり子「『官許仏和辞典』と岡田好樹をめぐる」『名古屋大学附属図書館研究年報』第6号2008 / 電字版。該辞典は国立国会図書館近代デジタルアーカイブで閲覧可能。
- 18) K. T. Wu (吳光清), “the Development of the Typography in China during the nineteenth Century”, *THE LIBRARY QUARTERLY*, vol. 22 no. 3, 1952.7。宮坂弥代生「マカオ時代の American Presbyterian Mission Press　美華書館前史　その1」明治学院大学キリスト教研究所『紀要』第36号2004.1.20。馮錦榮「美国北長老会澳門“華英校書房”（1844-1845）及其出版物」珠海市委宣传部、澳門基金会、中山大学近代中国研究中心主編『玉海、澳門与近代中西文化交流　“首届珠澳文化論壇” 論文集』北京・社会科学文献出版社2010.7
- 19) この華花印書局という名称は、今まで知られていない。「己未歲浙寧華花印書局新鑄」と明記した書籍『耶穌基督救世主新約全書』だ。己未は1859年を、浙寧は浙江省寧波を意味する。その書影が、つぎの書籍に掲げられている。居密 (Mi CHU)、楊文信 (Man Shun YUENG) 合編『CHRISIANITY IN CHINA 基督教在中国』The Library of Congress, U. S. A.、台湾・漢世紀數位文化股份有限公司2009.9 / 電字版。75頁。華花聖經書房のほか、華花聖書房、華花印書房、華花書局をあげる次の論文がある。韓琦「從澳門、香港到上海　19世紀中葉西方活字印刷技術在中国的傳播」香港城市大学中国文化中心、出版博物館編『出版文化的世界：香港与上海』世紀出版集團、上海人民出版社2011.2。

- 142頁。また、「寧波華花印書房」をあげる文章がある。前出、小宮山博史「一九世紀ヨーロッパ・中国での明朝体金属活字の開発と日本への伝播」261頁。ただし、同論文262頁に掲げられた挿図48の説明文は「寧波華花聖經書房」となっている。
- 20) 前出『CHRISIANITY IN CHINA 基督教在中国』40頁に「蘇松上海美華書局」と見える。
『新約聖書』1863
- 21) 後出馮錦栄「約翰・勞理・馬蒂爾 (John L. Mateer, 1848-1900) 与上海美華書館」213頁に掲げられる書影を参照。『漢英韻府』1874に「滬邑美華書院銅板梓行」とある。
- 22) 樽本「美華書館名称考」「宋家姉妹の父親は商務印書館を創設したか チャーリー宋と美華書館」「美華書館の最期」。いずれも『商務印書館研究論集』所収
- 23) マッキントッシュ Gilbert McIntosh, *MISSION PRESS IN CHINA, SHANGHAI: American Presbyterian Mission Press, 1895* / 複写版。漢訳がある。G・麦金托什 Gilbert McIntosh 著、方麗訳、車茂豊校「美国長老会書館（美華書館）紀事」『出版史料』1987年第4期（総第10期）1987.12。つぎにも収録される。宋原放主編、汪家燊輯注『中国出版史料・近代部分』第1巻 武漢・湖北教育出版社2004.10。ページは、英語原文と雑誌掲載の漢訳。英文25頁、漢訳16頁
- 24) 一説に1894年、北京のアメリカ外国伝道局 (American Board of Commissioners for Foreign Missions, MacGillivray, 640頁) 印刷所。また後述する『C・W・マティーア伝』でも the mission press of the American Board at Peking とする (278頁)。漢訳では「美国公理会印書局」(179頁)。
- 25) John T. Faris, “ V THE UNUSUAL EXPERIENCES OF A MISSIONARY Chapters in the Life of Calvin W. Mateer ”, *REAPERS OF HIS HARVEST*, 1915 / 電字版。35-36頁
- 26) 樽本「マティーアと『釦子記』」『清末小説から』第105号所収
- 27) Daniel W. Fisher, *CALVIN WILSON MATEER, FORTY-FIVE YEARS A MISSIONARY IN SHANTUNG, CHINA; A BIOGRAPHY*, The Westminster Press, 1911 / Bibliolife 複写版。伝記と略す。これには漢訳がある。(美)丹尼爾・W・費舍著、関志遠、苗鳳波、関志英訳『狄考文伝 一位在中国山東生活了四十五年的传教士』桂林・広西師範大学出版社 2009.12。漢訳と略す。
- 28) “ fronting on the river, a house was built for Mr. Culbertson, and along on the north side of the canal towards the city were the Press buildings, ith a chapel at the west end and the rooms over it for the accommodation of the superintendent. ” Farnham, “ Historical Sketch of the Shanghai Station ” / 電字版 / 複写版。60頁
- 29) 1867年、すなわち長男カルヴィン以前に音楽符号活字を製造したという記録があるという。前出、馮錦栄「姜別利 (William Gamble, 1830-1886) 与上海美華書館」、314頁。そ

- うすると長男カルヴィンがつくったのは、ギャンブル作成のものとは別物か。
- 30) 国立国会図書館近代デジタルアーカイブ
- 31) 該当する書籍を『馬太伝福音書』だとする論文がある。馮錦栄「約翰・勞理・馬蒂爾 (John L. Mateer, 1848-1900) 与上海美華書館」(関西大学文化交渉学教育研究中心、出版博物館編『印刷出版与知識環流 十六世紀以後の東亜』世紀出版集団、上海人民出版社2011.10. 203-204頁)。また、該書1875年版の書影を掲げる。
- 32) 小塚昌彦「蠅型電胎法による母型製作 本木活字の復元へ向けて」に詳しい。前出『日本の近代活字 本木昌造とその周辺』所収。また、『本木昌造と日本の近代活字』大阪府印刷工業組合2006.9.15
- 33) 鈴木広光「漢字鑄造活字の開発と日本への伝播」。『日本の近代活字 本木昌造とその周辺』所収。88頁。また、『本木昌造と日本の近代活字』所収。156頁。小宮山博史『日本語活字ものがたり 草創期の人と書体』誠文堂新光社2009.1.23. 111頁。また、前出『CHRISIANITY IN CHINA 基督教在中国』51頁に1865年重版本が収録されている。
- 34) J. M. W. Farnham, "Historical Sketch of the Shanghai Station", *JUBILEE PAPERS OF THE CENTRAL CHINA PRESBYTERIAN MISSION, 1844-1894*, SHANGHAI: American Presbyterian Mission Press, 1895 / 電字版 / 複写版。66頁
- 35) ホルトによれば、三男ジョンが来華した1871年夏に長男カルヴィンは責任者の席を退いたとある。W. S. Holt, "the Mission Press in China", *THE CHINESE RECORDER AND MISSIONARY JOURNAL*, vol.10 no.3, May-June, 1879. 218頁。前出 John T. Faris, "V THE UNUSUAL EXPERIENCES OF A MISSIONARY Chapters in the Life of Calvin W. Mateer" では在任期間を1870-1872年とする。42頁
- 36) 中国人研究者は靖遠里^{ママ}と書いている。1例だけ示す。元青主編『中国近代出版史稿』天津・南開大学出版社2011.2. 86-87頁。靖遠里は、清遠里と通音する。だが、同じではない。靖遠里は、実際には2カ所ある。「英界 松江路北 蕪湖路南(福建路東)」および「美界 南潯路西 閔行路東(百老匯路南)」だ。いずれも清遠里とは明らかに違う場所にある。上海関係の辞典などでも同じ誤りを見かける。
- 37) 前出 McIntosh の前言 preface (Shanghai, 1st January, 1895.)、序文 introduction (Shanghai, 19th May, 1894.) には、1895年と1894年の違いはある。だが、住所は同じく 18 Peking Road.である。
- 38) Rev. C. E. Darwent, M. A., *SHANGHAI: A HANDBOOK FOR TRAVELLERS AND RESIDENTS TO THE CHIEF OBJECTS OF INTEREST IN AND AROUND THE FOREIGN SETTLEMENTS AND NATIVE CITY*, Kelly and Walsh, Limited(1911) / 電字版。27頁。ただし、"Jewish Synagogue, 18, Peking Road" (144頁) と番地を間違っている箇所がある。

誤るくらいに近い、という意味か。

- 39) 唐振常『近代上海繁華報』香港・商務印書館有限公司1993.7。217頁の写真を引用する。
- 40) 木之内誠編著『上海歴史ガイドマップ』大修館書店1999.6.20。69頁。王健『上海的猶太文化地図』上海文藝出版(集团)有限公司2010.4。34頁、114頁では阿哈龍會堂とある。
- 41) 前出王健『上海的猶太文化地図』34頁では埃爾會堂とある。
- 42) この尖塔は、建設当初にはなかった。後に増築されたもの。ギルバート・マッキントッシュ Gilbert McIntosh 著、宮坂弥代生訳「美華書館六十年史」(『(季刊)印刷史研究』第5巻第1号(通巻第7号)1999.7.1。36頁)に尖塔のない写真が掲げられている。以下、「六十年史」と略す。
- 43) “ the Lowrie Memorial Chapel ” , *THE CHINESE RECORDER AND MISSIONARY JOURNAL*, vol.26 no.2, February, 1895 / 電字版。96-97頁
- 44) 樽本「美華書館問題」
- 45) 前出 Darwent, *SHANGHAI*, 146頁。「教団は、1848年に活動を開始し、1858年南門に最初の建物が建設された。1874年に印刷所が、1896年にラウリー記念教会堂が北京路に設立された」。ここに書かれた事柄は、それぞれが存在している。しかし、判明している時期とは少し異なる。
- 46) ファーナム Farnham, “ Historical Sketch of the Shanghai Station ” , 46頁。該書の発行は1895年である。記述内容は1894年までのはず。だが、1895年に完成する記念教会堂にもファーナムは言及している。建築中の教会堂を見ながら文章をつづったと考える。
- 47) Alexander Wylie, *MEMORIALS OF PROTESTANT MISSIONARIES TO THE CHINESE, SHANGHAI*: American Presbyterian Mission Press, 1867 / 電字版。231頁。また、高谷編訳『ヘボン書簡集』44頁注2(『全集』37頁注1)でも「婁」を使用している。小さいことをひとつ。書簡44頁訳注2はルーベンの綴りを Rueben とする。全集37頁訳注1も同じ。誤りだろう。正しくは Reuben だ。
- 48) 魏外揚「最早在中国殉道的宣教士 婁理華」『宣教事業与近代中国』台湾・宇宙光出版社1978.11。71頁
- 49) 阮仁沢、高振農主編『上海宗教史』上海人民出版社1992.7 / 1993.1第2次印刷。828頁
- 50) ファーナム Farnham, “ Historical Sketch of the Shanghai Station ” , 46頁。67頁もほぼ同様。
- 51) 上海格致書院が美華書館から土地を購入したことは、つぎの文献にも言及がある。王爾敏『上海格致書院志略』香港・中文大学出版社1980。16頁。同年四月二十七日(一八七五年五月卅一日)美華書館より土地を購入したとする。「地価共値四千五百兩」。また、郝秉鍵、李志軍『19世紀晚期中国民間知識分子的思想 以上海格致書院為例』北京・中国人民大学出版社2005.9。17頁。第7回理事会(1875.5.31)において英租界内旧跑馬

場附近に土地を購入した。こちらには金額は書かれていない。なお、馮錦榮「約翰・勞理・馬蒂爾 (John L. Mateer, 1848-1900) 与上海美華書館」218頁は、名称を区別している。Chinese Polytechnic Society は準備段階での名称。Chinese Polytechnic Institution が成立後の名称だという。前出ファーナム Farnham, “ Historical Sketch of the Shanghai Station ”, 67頁では、the Polytechnic Institute とする。『list.』16頁は、Chinese Polytechnic Institution and Reading Rooms。

52) 前出 Holt 218頁。McIntosh 英文24頁、漢訳16頁

53) 別の証言は、前出 Farnham, “ Historical Sketch of the Shanghai Station ”, 66-67頁がある。大要はつぎのとおり。1874年以後のこと。小東門外の印刷所の建物は広くて使い勝手がよかった。しかし、近所と周囲が工員たちの道徳にとっては都合が悪くなった。そこで新しい土地をさがすことにした。今は上海格致書院が建っている土地を最初に購入したが、後に (上海格致書院へ) 売却し、北京路18号にある家屋を購入した。移転の理由は、マッキントッシュの記述とは異なる。

54) 美華書館において三男ジョンがあげた多くの業績については、前出馮錦榮「約翰・勞理・馬蒂爾 (John L. Mateer, 1848-1900) 与上海美華書館」が詳しい。209-219頁

(たるもと てるお)

<http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

『清末小説から』第104号 2012.1.1
 商務版「説部叢書」研究の昔と今2
 ……………樽本照雄
 《社會小説 人壽保險》の原作…渡辺浩司
 容懿美譯《人靈戰紀土話》考略…姚 達兌
 傅蘭雅“時新小説”征文獲獎作品
 序文鈔(下)…………劉 德隆

『清末小説から』第105号 2012.4.1
 マティーアと『釦子記』…………樽本照雄
 《拊髀記》の原作…………渡辺浩司
 傅蘭雅“時新小説”征文參賽作者考(一)
 ……………姚 達兌

『清末小説から』第106号 2012.7.1
 アメリカ人宣教師の暦…………樽本照雄
 《愛國小説 鵠》の原作 / 《拊髀記》
 の原作(補)…………渡辺浩司
 傅蘭雅“時新小説”征文參賽作者考(二)
 ……………姚 達兌

『清末小説から』第107号 2012.10.1
 商務印書館の名称と日中合弁問題1
 ……………樽本照雄
 《劍光蝶影》の原作…………渡辺浩司
 張声和略考 傅蘭雅“時新小説”
 征文參賽作者考(三) ……姚 達兌